# 「ときじく」

ふじさんろくおうむなく
～富士山麓鸚鵡鳴～

作・演出　松村武

番無雨(バンブウ)
丹治(タジ)まもる

番政(バンマサ)
番美佐子
番ひばり
丹治宗助
丹治いろり
長老
世話役
安生ばんば

ヤミマ

カゲマ
クラマ

ジョフツ
バンブウ(少女)
タジマモル(少年)
イソ
ハンサイ
カモツヌ

クラモチ
イソノカミマロタリ
オオトモミユキ・
アベミウシ・
イシヅクリ・

爺さん
婆さん
子供たち

# 1

山の麓のさびれた村に二軒のボロ屋が並んでいる（番家と丹治家）
人とも鳥ともつかぬ三羽の鸚鵡が飛んできて、番家の傾いたボロ屋の屋根にとまる

ヤミマ　願いましてはルートゴルートゴ。三羽の鸚鵡が飛んできて、傾いたボロ屋の屋根にとまる
カゲマ　ルートゴルートゴ。三羽が羽を休めたボロ屋に住むのは、番家の一族である
クラマ　ルートゴルートゴ。番家の財政はそのボロ屋のように傾いている
ヤミマ　だが番家の隣にある丹治家もまた、番家に劣らず家が傾いている
カゲマ　だから三羽は丹治家の屋根で羽を休めても体感としては同じことだった
クラマ　しかし三羽の鸚鵡は、その日は番家の屋根で休むことにした
三羽　理由は特にない
番無雨　さっきからうるさい鸚鵡どもだね
三羽　ルートゴルートゴ
ヤミマ　うぐいすはいくら鳴いても煙たがられず、人間は待ち望んだ春の到来に歓喜するだけだというのに
カゲマ　鸚鵡がちょっと調子に乗ると、人はうるせえなと舌打ちを始める
クラマ　一体全体、この扱いの違いはどういうことだ
番無雨　そりゃおまえらが誰かの受け売りの言葉でしか鳴かねえからだろうが、あぁ？
三羽　ルートゴルートゴ
番無雨　意味もわかんねえくせに、そいつは一体どこのどいつの鸚鵡返しだ、バカヤロウ？
三羽　鸚鵡返しだバカヤロウ、鸚鵡返しだバカヤロウ
番無雨　よしきた、十羽ひとからげに殺してやる（石を手に）
三羽　三羽だ、三羽だ、鸚鵡deサンバだ

番無雨　それも言うなら、三羽ガラスだろ？そうか、おまえら本当は鸚鵡じゃなくて、色を落とせば正体はただのドス黒いドスカラスだな？

三羽　ルートゴルートゴ、不死山麓鸚鵡鳴く。不死山麓鸚鵡鳴く

番無雨　この番婆の目を節穴と思うなよ

番無雨が石を投げると鸚鵡は飛び去る

番無雨　…外したか…番婆(ばんばば)一生の不覚

美佐子　(外へ出てきて)お母さん、夕飯のご準備が

政　(追いかけて)だからいいんだよ、美佐子

番無雨　え？夕飯まだだっけ？

政　ほら、せっかく忘れてたのに

美佐子　あなた、そんな言い方

番無雨　夕飯、何だっけ？

政　だからこれから食べるんだろうが、ババア

美佐子　あなた…ひばりの前でそんな

政　ひばりはもうそんなこと気にしてないよ

ひばり　大丈夫。気にしてないよ

美佐子　むしろ気にしてるんですよ

政　ひばりの話をしてるんじゃないんだ

番無雨　政、今お迎えが来たよ

政　は？

番無雨　お迎えのドスカラスが鳴いたんだよ

政　腹減ってないんだったら、無理して食わないでいいからな
美佐子　さあ、お母さん、夕飯、お待たせしました
番無雨　いらないよ、お祖母ちゃん、腹減ってないから
ひばり　嘘でしょ？
番無雨　嘘はつかないよ
ひばり　嘘つかなくても無理してるんでしょ？
政　いらないっ言ってんだから、もういいんだよ
美佐子　でもあなた…
番無雨　美佐子さん、いらないから
美佐子　でもお母さん
番無雨　来月の頭にはもう行くんだから

カラスが鳴く　カアカアカアカアカア

ひばり　お祖母ちゃん、来月のそれって…
番無雨　今日も綺麗だねえ。夕暮れ時の赤い不死山(ふじやま)は。ああ、山が赤いんじゃないね。赤いのは空で、不死山は真っ黒だ。もうそんなことがごっちゃになってるわ
政　日が暮れる前に家ん中入れよ。暗くなると急に冷えるんだから
美佐子　ホント急に冷えますから
番無雨　どんだけ冷えたって、来月の頭にはもう行くんだから
美佐子　まあ、そのことはおいおい…
ひばり　本気なの？
番無雨　八十越えたら、それはルールだからさ

全　　…

番無雨の腹が鳴る音

番無雨　（鼻歌でごまかす）
美佐子　お腹、すいてきたんじゃありません？
番無雨　え？別にい。何で？
ひばり　いいよもう、面倒くさい。一緒に食べようよ、お祖母ちゃん
政　いいんだ、ひばり。いらないって言ったんだから
ひばり　もういいじゃない？みんなで分ければさ
政　お祖母ちゃんはいらないんだって
番無雨　いらないんだよ
政　食ったって食わなくったって、もう同じなんだよ
美佐子　あなた
番無雨　それよりさ、ちょっと、さっきから、あそこの影から、誰かが私をターゲットにしてんだよね
政　何言ってんだよ、自意識高いんだよ、ババアのくせに
美佐子　あれ…お隣の…
ひばり　お爺ちゃんじゃない？
番無雨　まもるかよ
まもる　番無雨！

丹治まもるが隣の家から出てくる
すかさず、まもるの孫、いろりが追いかけてくる

いろり　こら、まもる！すいません、言い聞かせますんで
ひばり　言い聞かせなくていいよ、いろりん。何も悪いことしたわけじゃないんだから
いろり　でもひばりん、覗きはダメでしょ。お祖母ちゃん怖がらせたじゃない？
番無雨　別に怖くなんかないよ、こいつなんか
政　でもまあ気持ち悪いよな
美佐子　あなた
いろり　すいません。まもるはどうも、そちらのお祖母ちゃんのことがえらいお気に入りみたいで
まもる　そんなんじゃないよぉ
番無雨　そんなんじゃないと思うよ
政　必死に二人で否定すんなよ、気持ち悪い
美佐子　ごめんなさいね、何だか今日はこの人、気が立ってるみたいで
政　何だその言い方？
いろり　いえ、こちらのせいですから
ひばり　ま、隣同士で幼馴染っていうのはちょっと特殊な関係だよ。いろりんと私だってそうじゃない？
いろり　そうかな
ひばり　ましてや、お互い長い年月を共にした男女なわけで

丹治宗助が隣の家から出てくる

宗助　番さん
政　あ、丹治さん
美佐子　どうも。主人がいつもお世話になっております

宗助　どうも申し訳ありません。うちのジジイが何か、また？
美佐子　そんな。別に何てこともないんですよ
宗助　どうもすいません。家の中戻って。いろりも…眼を離しちゃダメだって言ってるだろ
いろり　百パーは無理だろ
宗助　本当すいません、政さん、この通り(ぞんざいな土下座)
政　いやいや、別にいいんですよ、宗助さん、そんな、もう
いろり　何が起きたかろくに確認もしないで
宗助　何か起きたんですか？
ひばり　何も起きてないです。
宗助　ちょっとね
番無雨　あなた
宗助　ちょっと何？
番無雨　ちょっと、見とれてただけですよね
宗助　またかよ、ジジイ？
番無雨　つまり、まもるもあれだろ？来月には行くんだろ？

カラスが鳴く　カアカア

宗助　それで、ここ(胸)ざわついてんだろ？
番無雨　…まあ、はい、そうですね
宗助　…ルールだもんな
いろり　さ、もう周りに迷惑かけないでくれよ
宗助　私は何も迷惑かけてないよ

宗助　わかってるよ。おまえに言ってる文脈じゃないだろ
いろり　こっち見て言うからさ
美佐子　さあ、お母さんも、ご飯行きましょ
政　だからおまえさ、いらないって言ったんだからさ
ひばり　さ、お祖母ちゃん、一緒に食べよ
番無雨　まもるも一緒に来るか？
まもる　いいの？
政　おい、待て待て、何言ってんだ？
宗助　いやいや、そんな、行きませんから。行かないでよ
美佐子　そうですか？
宗助　行かせませんから
政　(美佐子に)そりゃそうだろ、ただでさえ、おまえ
宗助　もうほとんど食べられませんし
政　そういうもんですよ、年相応ですよ。うちのババアの食欲がおかしいんです
美佐子　お母さん、異様に歯が丈夫なんですよね
番無雨　おい、やめろ
宗助　いや、いつまでもお達者で、お祖母ちゃん。うらやましいですな
番無雨　やめろ！やめてくれ
ひばり　お祖母ちゃん、歯の事言われるとすごい嫌がるんだから
番無雨　ああ、みっともねえ、みっともねえ
ひばり　ほら、はじまった
政　そりゃ、八十のババアの大食らいはみっともねえよ。自分でも恥ずかしいんだろ
美佐子　あなたそんな

まもる　にい…
番無雨　…おい、まもる、おまえ、今笑ったな
まもる　笑ってないよ
番無雨　笑っただろ
政　笑ってないんだよ。もういいだろ
いろり　笑ったんだと思うよ
番無雨　ほらおまえ、笑ったな、この野郎
宗助　最近、癖でニィってやるんですよ。何だかわからないけど、顎がなんかしっくりこないのか、別に笑ってるわけじゃないと思いますが。すいませんね。もうすっかり耄碌して
政　お互い様ですよ
番無雨　まあどっちにせよ来月までだ。どうだっていいよ

カラスが鳴く　カア

番無雨　仕方ねえよな、まもる。ルールだからさ
まもる　なあー教えてくれよ
番無雨　教えることはねえよ
まもる　俺達には一体何があったんだっけ？
番無雨　何もねえよ
まもる　何かあったろ
番無雨　そりゃいろいろあったよ
まもる　いろいろって何だよ
番無雨　そりゃ一口じゃ言えんだろ！

まもる　あぁぁぁぁぁぁ！（真っ逆さまに奈落へ落ちていくような声）
宗助　いろり！
いろり　まもる！
宗助　本当騒がせて申し訳なかったね、政さん
政　いえいえ。宗助さん、年寄り抱えて大変なのはお互い様ですから
ひばり　あのさ…
政　何だ、ひばり？
ひばり　そのルール、何であるの？

三羽の鸚鵡が再び飛来

ヤミマ　貧しいからだ！村が、町が、国が、そしてそこに生きる者の発想があまりに貧しいから、八十を越えた老人は、口減らしに不死（ふじ）山麓の樹海へ捨てられる
カゲマ　二度と戻ることができない樹海の奥地に置き去りにされる
クラマ　この世に数える命を減らす。それが人間全体を滅び尽くさぬためにたどり着いた、最後の浅知恵だとは
三羽　ルートゴルートゴ、ルートゴルートゴ、不死山麓鸚鵡鳴く

カンカンという音に押し殺した悲鳴が混ざって闇に響く
暗がりにて石で歯を叩き割ろうとしている番無雨

政　おい、ババア何やってんだ！
美佐子　お母さん！
ひばり　お祖母ちゃん！

振り返った番無雨の口は血まみれ

番無雨　びばでぃー
ひばり　キャアァ！
番無雨　こえで、ほばあじゃん、はともに、めひもくえんふぁ。ひぐだ、はだがふぇっでも、ふぁがぼれて、なんでいぼ、はめんは、びばでぃ
ひばり　トラウマだ！これトラウマだ！
美佐子　お母さん！頑張りましたよ。これでご近所にひとつも恥ずかしいことないですよ。もう、ごくつぶしなんて陰口、誰にも叩かせませんよ
政　…鬼婆かよ
番無雨　ばだ、ひにすんだ。ないげづには、ぼう、ひぐんだがら
政　来月にはもう行くんだから…気にしなくていいのは、おめえなんだろうがババア！無駄なバカしやがってよぉ
番無雨　こど、おでた、ばえばは、やでぃぼうでぃだげどう
政　何言ってんだかわかんねえんだよ、おふくろ！
ひばり　折れた歯を屋根に放り投げようって言ってんじゃない？
美佐子　よくわかったね、ひばり
政　ガキの乳歯の生え変わりじゃねえんだよ、ババア。そんなことして、残り僅かな人生にどんな願かけんだよ？
番無雨　やずだかだ、でぃぼ
政　でぃぼ？
ひばり　「安らかな死を」

番無雨　ましゃ、ばしだやばじびぐどじば、ぎっとゆぎがふどうじょ
ひばり　えっと…
政　…政、わしが山に行く時は、きっと雪が降るぞ

カラスが夕空を飛んでいく　カアカアカアカア

美佐子　秋になろうとする頃、山に行ったことのある長老と世話役を迎えて、お隣の丹治家と共同でお決まりの宴を催すことになりました。やもめの宗助さんといろりちゃんだけじゃ準備も大変だろうし、それぞれの家でやるよりは、物入りも半分で済む。何とかお互い工面して体裁を整え、酒だけは、番婆がいつのまにかこっそり仕込んでおいた、とっておきのどぶろくだと二人に振舞いました。まもる爺はもう意識朦朧として、ブツブツ言いながらそこらをうろついてただけで、客人の世話は、番婆がもっぱら一人で取り仕切り、他の者は、決して手を出してはならぬものだと固く言われて、私たちはその宴の成り行きをはらはらしながら遠巻きに見ていました

番家を訪ねてきた長老、世話役に番無雨が酒をふるまう
二人の話を神妙な態度で聞く政と宗助

長老　不死山まいりはつろうございますが、ご苦労さんでございます
無雨　まあまあまあまあ（酒肴をすすめる）
長老　えへん、ああ…お山へ行く作法は必ず守ってもらいましょう。一つ。お山へ行ったらもの言わぬこと
宗助・政　はい
無雨　まあまあまあまあ（注ぐ）
世話　お山へ行く作法は必ず守ってもらいましょう、一つ。家を出るときは誰にも見られないように出ること

宗助・政　はい
無雨　まあまあまあまあ（注ぐ）
長老　お山へ行く作法は必ず守ってもらいましょう。一つ。山から帰るときは必ず後ろを振り向かぬこと
宗助・政　はい
世話役　お山へ行く道、復唱してみ
政　お山へ行く道は裏山の裾を廻って、次の山の柊の木の下を通って裾を廻り、三つ目の山を登っていけば池がある
宗助　池を三度廻って石段から四つ目の山へ登ること。頂上に登れば谷のま向こうが不死の山。谷を右に見て次の山を左に見て進むこと。谷は廻れば二里半
長老　途中七曲りの道があって、そこが七谷というところ。七谷を越せばそこからは不死の山への道になる
世話役　不死の山には道はあっても道がなく、木の間を上へ上へと登れば神様が待っている
無雨　まあまあまあまあ（注ぐ）

長老と世話役は最後にぐびっと飲み干して立ち上がり、出ていこうとする
宗助と政が戸口まで送ろうとすると二人を手招きして、少し離れたところに連れていき

長老　嫌ならお山まで行かんでも、七谷のところから帰ってもいいのだぞ
政　それはどういうことですか？
宗助　政さん、質問はダメだから
政　ああ、すいません
世話役　まあ、これも、誰にも聞かれないように教えることになっているから。言うだけは言っておく

長老と世話役は帰っていく

数日後、誰もが寝静まった深夜
外ではふくろうの声が聞こえる　ふぉーふぉーふぉーふぉー
政が家からそっと出てくる。まだ迷っている風情
無雨が出てくる。迷ってる政をせかし、戸板を背負わせ、そこに乗っかる
政は無雨を背負って山へ歩き出す

（笛が鳴り、神楽や祭りのような雰囲気の中で昔から伝わる不死山まいりの歌が聞こえる）

唄（大勢）　不死山まいりはつろうござんす　ご苦労さんでござんすな
お山へ行ったら物言わぬこと
誰にも見られずうちを出ること
必ず後ろを振り向かぬこと

政　裏山の裾を廻って柊の木の下に来た。枝が笠のように茂っていて、その下を通っていくのは、どこかの家の中へでもはいってゆくように不気味な暗さだった。そこまでは来たことがあるところだったが、そこから先は不死山まいりでなければ行ってはならないと言い伝えられている道だった。普段は柊の木の下を通らないで右か左に回る道を行くのであるが、今はまっすぐに行くのである

草むらをかき分けて山道を進み、池の畔を廻り、急な坂を無言で登っていく
見晴らしの良い高台に出ると、谷を隔てて真っ黒な不死山の影がそびえている

山域に漂う太古のジョフツの気配がそんな政と無雨をどこか遠いところから見守っている

ジョフツ　　そこから不死山との間には地獄へ落ちるかと思われるような谷に隔てられていた。尾根伝いに少し下って進んでいく道は、左は絶壁、右はそそり立つ山の坂である。四つの山に囲まれた奈落の底のような谷を廻ると、七谷のところまで来た。そこを越すと、そこからは道はあれども道はない。登って登って、やがて大きい岩を通り過ぎた途端、岩の影に誰か人がいた

岩影の人のような気配に驚いて政はつまずいてしまう
拍子に人影のようなものが倒れてくると、それは白骨死体であった

政　　ひえっ！

闇に目が慣れてきて見渡すとあちらこちらに白骨死体が散在し、地面には細かく骨が散らばっている
そこは不死山に捨てられてきた爺婆たちのなれの果てか
すると一つの死体が動いたように思えて政は慄く
倒れた死体の腹の中からカラスが鋭く鳴きながら飛び立つ
その声をきっかけにして大量のカラスの群れが一斉に空に群がり騒ぎ出す

政　　カラスめ！カラスめ！
無雨　　しっ！（背から下ろせという合図）

政は無雨を地面におろす
無雨はむしろを敷いてそこに座る
無雨は政の手を握り、政を振り返らせて、そのままっすぐ帰るようにと背中を押す

泣きながら元の道を振り返らず帰っていく政
転がっていた死体につまずくと鎮まっていたカラスがまた飛び立ち騒ぐ
見れば、その死体の首には縄がまかれている。事情は分からぬが、その死体の主はこの場所で縊り殺されたのだとわかる
見上げれば粉雪が静かに降っている

政　　…あ

政は思わず振り返り、元の道を無雨のもとへ戻って走る

ジョフツ　　政は猛然と足を返して山を登りだした。山の掟を守らなければならない誓いも吹き飛んでしまった。雪が降ってきたことを母に知らせようとしたのである。知らせようというより、雪が降ってきた、と話し合いたかったのである。本当に雪が降ったなあ、とせめて一言だけ母に言いたかったのである。きっと雪が降るぞと無雨が言ったとおりに、雪が降ってきたのだ

戻ると粉雪をまとった無雨が座っている

政　　おっかあ、雪が降ってきたよう！
無雨　　(帰れ帰れと手振り)
政　　山へ行く日に雪が降るのは、運がいいんだよ。おっかあ、本当に雪が降ったなあ…
ジョフツ　　政はそう言うと脱兎のように駆けて山を降った。山の掟を破ったことを誰かに知られやしないかと、飛び通しで山を降った

唄(大勢)　　不死山まいりはつろうございます。ごくろうさんでございますな。ごくろうさんでございますな

まもるを背負った宗助が山を登ってくる。その後ろをいろりが尾行している

ジョフツ　　誰もいないはずの七谷の上のところまで下って来たとき、丹治家の宗助が雪の中で背板を肩から降ろそうとしているのが目に入った。背板にはまもるが乗っていて荒縄で罪人のように縛られている

宗助はまもるを背板から下す
嫌がって逃げようともがくまもるを押さえつけ、力ずくでまもるを崖下に落とそうとする

政　　…七谷から帰ってもいいぞというのは、こういうことか…

宗助とまもるは激しくもつれ合うが、ついにまもるは谷底に落とされる

まもる　　あぁぁぁぁぁぁ…

落ちた谷底から黒い煙のように、大量の黒いカラスが舞い上がり、カアカアと騒いで旋回し、再び落ちていくまもるに一斉に群がっていく
腰を抜かして転げるように山を下りていく宗助
尾行してきたいろりがその一部始終を岩陰から目撃したことを政は知る

いろり　　…うおおおおおおお！

雄叫びをあげていろりはうなだれて下山していく
政も下山していく

ジョフツ　　…山へ行く日に雪が降るのは運がいい。その前に雪が降り積もっていては、この不死の山へは入れない。
山へ入ってから雪が降れば、その命のすべては白く冷たくゆっくりと閉じていき、やがて時が凍りつく。
美しいままの、生きたままの時間が永久に凍り付く

降りしきる雪の中で眠りそうになっている無雨がそのジョフツの声を聞く

番無雨　　思い出した…その声はもしかして…フッさんか？

血まみれで手足が折れ、化け物のような姿のまもるが谷底から這い上がってくる

まもる　　番無雨！
番無雨　　また、まもるかよ
まもる　　おかしいよぉ…死なないよぉ…死なないんだよぉ…
番無雨　　…そりゃそうだ…私らは食ったんだから…ときじくのかくのこの実を…

## 2

古代。秦の時代の中国北部東岸
入江に大きな船が何隻も停泊している
大勢の人が行き来して、船に荷を積み込んでいる
（この情景を遥か遠くから見ているものとして番無雨、まもるはそのままいる）
役人のハンサイに怒鳴り散らしている船乗りの頭イソ

イソ　どう考えてもそんな人数、乗れるはずねえだろー出航前に船が沈んじまうぞ、ハンサイさん
ハンサイ　確かに三千人というのは、あまりに大げさな数字だな
イソ　だったら、そんなこと平気な顔してシレっと言ってくんじゃねえよ
ハンサイ　私はただの役人だ。私に目くじら立てたってしょうがねえよ、イソやん
イソ　じゃあ誰に目くじら立てればいいんだよ？
ハンサイ　目くじらはもう立てないほうがいいかもな
イソ　目くじらはもういいんだよ
ハンサイ　だが行く手の海にはめくじらの群れが待ち受けているというしな
イソ　めくじらじゃなくて、普通のクジラな。あと獰猛なサメな。冷酷なシャチな。危険がいっぱいなんだよ。
ハンサイ　何せ今だ誰もちゃんと渡り切ったことのない東の海を行く。杜撰な計画じゃ乗り切れねえぞ
イソ　あんたがいれば何とかなるよ
ハンサイ　今までとは規模が違いすぎるんだよ
イソ　あんたのその臆病で慎重な舵さばきこそが、今度の無茶な航海に一番必要なものだ。だから私は他の船頭を差し置いて、今回の舵取りの棟梁にイソやんを推したんだよ
ハンサイ　他の連中が怖気づいただけだろ。何せあの…秦の始皇帝直々だからな

銅鑼の音

ジョフツ　「東方の海の彼方、夜明けの霧が晴れたほんの一瞬にだけ、水平線の雲上に浮かび上がる霊峰不死山。その幻の山の頂の仙人に会い、不老不死の秘術を持ち帰ること」

船乗り　ラー

ハンサイ　フッさん！

ジョフツ　ハンサイさん、ご苦労様です

ハンサイ　宮廷から？

ジョフツ　ようやく解放されました

ハンサイ　そいつは大変なご苦労でございました。イソやん、ジョフツさんだ。私たち役人同士の世界じゃ、畏れ多くもフッさんと馴れ馴れしく呼ばせてもらってる。始皇帝に直に意見を求められるほどの人物だが、そんなことは屁でもない。まず怒らない人だ。滅多にね。この途方もない大計画のすべてを立案した偉大な方士先生だ

イソ　方士って？

ハンサイ　つまり神仙の智を極めた占い師様だ

イソ　当たるも八卦、当たらぬも八卦？

ジョフツ　当たりますよ！

イソ　すぐ怒ってんじゃねえか？

ハンサイ　これ珍しいフッさんだよ。よっぽど緊張した局面におられたんだな

ジョフツ　この航海は一か八かの賭けなどではない！ちゃんとした知識と経験による予測によって、その安全と成功は担保されているのだ！

イソ　だから怒ってんじゃん

ジョフツ
イソ

…そう何度もしつこく申し上げてきました
もしかして、始皇帝に？

銅鑼の音

船乗り
ジョフツ

ハンサイ
ジョフツ
イソ
ハンサイ
ジョフツ
ハンサイ
ジョフツ
イソ

ラー
始皇帝は細部にわたって今回の計画の中身を吟味され、その成否を非常に気にしておられます。失敗は許されない
つまりしくじれば首が飛ぶ。これはまさに、フッさんにとって一か八かの船出になるってことだよ
だから一か八かとかじゃないですよ！
すぐ怒るじゃねえかよ
焦っておられるんだな
ところでおまえは誰だよ
船乗りのイソやんです。棟梁として今回の航海の指揮を執ってもらう
…ちゃんとお願いしますよ
…ちゃんとやりますよ！

銅鑼の音

ハンサイ
イソ
ハンサイ
イソ

しくじれば首が飛ぶのは、フッさんだけじゃないぞ、イソやん
わかってるよ。でもだからって首が飛ぶより先に、まず海の藻屑になるわけにはいかんだろ
その調子だ
それよりさ、万が一すべてがうまくいったっところでさ、その不死山ってところに、本当に不老不死の仙

ジョフツ　人なんてものがいるんでしょうね？
イソ　…います
ジョフツ　そんな奴に会ったことがある人間に俺は会ったことがないぜ
ハンサイ　います
イソ　私たちは、フッさん、あなたの言葉を信じるだけです
ジョフツ　で、あの始皇帝が信じたんだよな、あんたの言葉を？
ハンサイ　最終的には
この港の前代未聞の大騒ぎがその結果だ

船乗りたちは再び慌ただしく出航の準備を始める

イソ　…身震いするじゃないか。三千を越える人間と大量の武器食料を積んで、前人未到の東の海へ漕ぎ出す
この未曾有の大船団
ハンサイ　ラー
イソ　すべてを手に入れた始皇帝にとって、最後に立ちはだかる最強の敵は、老いることだ
ハンサイ　その通り
イソ　つまりこの不老不死を求める航海は、不世出の英雄、秦の始皇帝最後の戦で、この俺はいわば、その歴史的決戦の最前線に挑む将軍ってわけだろ
ハンサイ　まあ…そういやそうだが
イソ　おい、ちょっと待て…何だあのガキども？

大勢の思春期の子供たちが船に向かって連れてこられる

ハンサイ

…三千人というのは、兵の数ではなかった。そこに雪崩れこんできた一群は、右も左もわからない、まだうら若き思春期の童男童女三千人…フッさんいわく、その三千の童は、不死の山へと至る航海成就のための海の神への生贄なのだという。この子たち三千の命を引き換えにして、たった一つの英雄の不老不死を手に入れる。それが私たち大人の任務であった…

荒れる海に出航する大船団

番無雨
ジョフツ
バンブウ（少女）

…確かそこにいた童の一人が私でしたね、フッさん？
バンブウ、今何か言いましたか？
はい、フッさん、あの夕焼けの向こうの空、天に向かって伸びあがるように渦巻く雲は、天国へと続く螺旋階段なのでしょうか？

ハンサイ
イソ
ジョフツ
イソ

あれは…あれ、動いてないか？
物凄い速さで。しかもこっちを追いかけてくる…
吉兆です！天が我らの航海を祝福している証だ！
なわけあるか。あれは竜だ。海を巻き上げる竜巻だ！

竜巻に巻き込まれ崩壊する船団

ハンサイ

その巨大な竜巻が通り過ぎたあと、半数の船の姿が消えていた。そして消えた船の分だけ、人も消えた。翌朝、昨夜のことが嘘のように青い海は静まり返っていた。フッさんは生き残ったものたち全員の奮闘をたたえ、感傷的になったイソやんが、天に拳を突き上げ、涙ながらに勝どきを挙げた

イソ

我ら海の子！偉大なる始皇帝の櫂となり、槍となれ！

船乗り

おおお！

ハンサイ　異様な高揚に包まれた船団は、半分になっても東の海へと進み続けた。その視線の遥か先…水平線の向こうの雲を突き抜けて、うっかり天空に頭を突き出した霊峰が一瞬見えたように思ったのは気のせいか？あれこそが、不老不死の仙人が住むという、我らの目指す不死の山ではなかったか？

イソ　今見た？みんな見た？今一瞬見えた。あれだよ、あれだろ？フっさん、あんた凄いよ。本当にあったよ、不老不死の霊峰が！

まもる　…その光景を覚えてるぞ…澄み渡った青空。その空を映す藍よりも青い海。仲間の死を乗り越えて生き延び、水平線に揺らぐ霊峰不死の頂を目にした異様な高ぶり…

ジョフツ　マモル君、今何か言いましたか？

マモル　はい、フッさん、さっきから船の下に浮き沈みする、生臭さとぬめりを伴う黒い影は、ここらの海の名物現象なのでしょうか？

ハンサイ　これは…これは生きてないか？

イソ　しかも物凄くでかくないか？

ジョフツ　吉兆です。海が我らの航海を祝福している証…

イソ　なわけあるか。こいつは海の大王、ダイオウイカ！

ダイオウイカに襲われ崩壊する船団

ハンサイ　そのでかすぎるイカとの遭遇でまたもや半数の船が海の藻屑と消えた…

イソ　我ら海の子！偉大なる始皇帝の櫂となり、槍となれ！

船乗り　おおおお！

ハンサイ　以後、このパターンが幾度となく繰り返された

船員　あああ！

後方にいた船乗りが巨大サメに襲われ食われてしまう

ハンサイ　…半分が半分になり、その半分がまた半分になり。半分になり。半分になり…二分の一賭ける二分の一賭ける二分の一賭ける…

イソ　…命賭ける、命賭ける、海駆ける、天翔ける！我ら海の子、偉大なる始皇帝の…

船乗り　おおおお！

番無雨　…それは先の見えるようで見えない、希望が少しづつ先細るばかりの、過酷な旅だったね

ジョフツ　バンブウ、今何か言いましたか？

バンブウ　はい、フッさん。このまま船団が半減を繰り返し、二分の一のジジョウを繰り返していくとすると、いつか一を割り、船団は全滅するのではないですか？

ジョフツ　知らない間に、いつのまにか成長したなバンブウ

マモル　俺も今同じこと考えてました！

バンブウ　無理すんなマモル

ジョフツ　こんな過酷な毎日では子供もたくましく成長せざるをえないですな

イソ　他人事かよフッさん、状況は結局これどうなんだ？うまくいってんのか？それともうまくいってないのか？

ジョフツ　おおむね計画通りです

ハンサイ　だとしたら酷すぎる計画だろ。捨て駒が多すぎる

番無雨　検討いたします

ジョフツ　我々はいつも肝心なところで、フッさんに煙に巻かれた

ハンサイ　…でもそのフッさんが、毎夜甲板に出ては、星空を見上げて一人涙し、いなくなった子供たちのために、何度も頭を垂れて、弔いと別れの祈祷を捧げていた姿を、私は覚えている。ある時…

番無雨　（祈祷の手を止め）誰だ？

バンブウ　(こっそり様子を見ていたが)そんなつもりは全然…
ジョフツ　…酷い大人達だと、思っているだろうな
バンブウ　いえ、始皇帝の命がかかっているのです。我らの命の一つ二つ、どうなろうが。永遠の御世の為の人柱となるのなら
ジョフツ　…君は、そんな言葉をいつのまに覚えた？
バンブウ　あの…
ジョフツ　たわけだ
バンブウ　え？
ジョフツ　たわけたことを堂々と言ってんじゃないよ
バンブウ　もしかして、お酒を飲んでいるのですか？
ジョフツ　…酒ってものには人を酩酊させる気持ちの良い成分が含まれている。だが、この成分は過剰に摂取すると、やがてそれなしでは過ごせなくなる。心を落ち着かせるために飲むはずなのに、飲めば飲むほど落ち着かなくなっていく。何かを考えたくなくて酒を飲むのに、むしろアリアリと考えざるを得なくなる…

番無雨　子供には難しい話だった。だが少なくともフッさんが悩んでいることは、ガキの私にも何となくわかった。
ジョフツ　人には秘め事が毒になる。何でだろう、自分以外の誰かに真実を話しておかないと苦しくて仕方がない。
バンブウ　隠し事がこれほど人の身体を蝕むとは思わなかった
ジョフツ　お邪魔しました(去りかけ)
番無雨　話はまだ終わっちゃいないぞ、バンブウ
ジョフツ　面倒くさいことになりそうだ。そう思って逃げ出そうとした私に、フッさん、あなたはまずこう言ったんだ
バンブウ　これは付け髭だ
ジョフツ　おおー道理でなんだか不自然だと思っていた

番無雨　そして自分は女だと言った
バンブウ　マジですか？
番無雨　それも何となくみんなわかっていた
ジョフツ　今のは相当驚いたことと思う。でもここまでさらして、なお隠し事はある
番無雨　それからあなたは酒に任せて、何もわからぬ少女に重大な告白をしたのです
ジョフツ　逃げたんだ
バンブウ　はい？
ジョフツ　逃げるために命がけで嘘ついた
バンブウ　逃げた？

ハンサイが柱の陰からこっそり覗いている

ジョフツ　私の親も兄弟も、親戚も、とても優秀で誠実な学者だったが…皆、始皇帝の手で殺された
バンブウ　え？
ジョフツ　真理を盾に、最後まで戦ったからだ
ハンサイ　…俗に始皇帝の焚書坑儒と呼ばれる暴挙がある。彼は、旧来の社会常識を覆すべく、敵国、斉の伝統的知識人たちを、書物ごと、大穴深くに突き落として灰になるまで焼き殺した…
ジョフツ　まだ幼かったという、ただそれだけで、私は奇跡的に禍を逃れ、今がある
ハンサイ　だからフッさんは、一族の伝統に反し、あえて真理から遠ざかった。結果的に絶望に繋がるしかなかったものに、一生を殉じる生き方はもはやできなかった
ジョフツ　むしろその正反対にある嘘や出まかせで、残酷な禍から己がいかに逃げきるか。それだけをずっと考え続けてきたんだよ
ハンサイ　つまりその時、フッさんが告白したことは、この不死山探索の大事業が、始皇帝をだます口八丁の出まか

せであったと…
ちょっと待ってくださいフッさん、そうなるとつまり、そんなフッさんの嘘に動員された私たちの人生は…
…私たちの人生は、その出まかせの巻き添えだった
さあ、それを聞いてどうする？
え？
どうする、ハンサイさん？
ハンサイさん？
…ハハハ(柱の陰から出てくる)
ハンサイさん、最初から私にはわかってましたよ。あなた、始皇帝の密命で派遣された、このジョフツの監視役なのでしょ？
…だとしたらどうします？
(慌てて飛び出してきて)それどころじゃねえぞ
どうしました？
空を見ろ。真っ黒だ。当たり前だ。夜だから。だがあれは夜の暗さじゃねえ
黒雲か
あれは吉兆…
なわけねえ、嵐が来るぞ！

バンブウ
番無雨
ジョフツ
バンブウ
ジョフツ
バンブウ
ハンサイ
ジョフツ
ハンサイ
イソ
ジョフツ
イソ
ハンサイ
ジョフツ
イソ

激しい嵐に巻き込まれる船
ハンサイが流されてしまいそうになる
ジョフツが必死に手を握ってとどめているが、限界がくる(あるいはわざと手を離したようにも見える)
マモルが助けんと飛び込もうとするがイソに止められ、ハンサイは流されていく

マモル　ハンサイさぁん！
まもる　…覚えてる…ハンサイさんをさらっていった、あの真夜中の嵐…やがてようやく静けさが戻った時には…
番無雨　…とうとうただ最後の一隻だけ。ポツリと波間を漂うその目の前に、大きな陸影が姿を現した
イソ　フッさん！
ジョフツ　…あったか…本当にあったか…
番無雨　そうフッさんが呟いた。そこが伝説の蓬莱の国だった。この国のどこかに不死の山がある
イソ　もしかしてあれが不死の山じゃねえか？
ジョフツ　…違います。そう簡単にたどり着けるはずがない
イソ　フッさんは見たらわかるんだよね。それがその山だって
ジョフツ　…わかります
イソ　あれじゃないんだね
ジョフツ　そうですね…あれは所詮、あ、そう山です
イソ　…あ、そう

唄(風の精霊)　ほほをなでる風　髪をとかす風

ジョフツ　風が心地いいね
バンブウ　蓬莱の国は雲の彼方の神仙境といいますが、まさにその言葉の通り、うららかな陽光に映える緑が実に豊かな美しい風土だ。人は住んでいるんだろうか。仙人様は何人くらいおられるんでしょうか
ジョフツ　…いいところだね
バンブウ　フッさん、聞いてもいいですか？

ジョフツ　何だい？
バンブウ　その…この前の話ですが…覚えていますか？お酒を飲んでいらしたから、もしかしたら…
ジョフツ　覚えてたら覚えてるし。忘れてたら覚えてないし
バンブウ　…どこからどこまでがフッさんの嘘なんですか？
ジョフツ　…とても信じられないものを力ずくで信じようとした。その振舞が嘘だというなら、そう言われても仕方ないし
番無雨　東の海の彼方にこんな国が本当にあるなんて、そもそもフッさんは信じてなかったんだ

ハンサイを乗せた船が追いかけてくる

ハンサイ　おーい！
イソ　ハンサイさん！
バンブウ　助かったんですね！ハンサイさん！

唄（海の精霊）　生きていたのか、ハンサイさん
生きていたとは、ハンサイさん

番無雨　ハンサイさんは、あの嵐に流されるまま結局大陸まで連れ戻され、浜に打ち上げられ、奇跡的に一命をとりとめたという。その後、回復してから宮廷へ報告のために出頭し、そこですぐさま新たな役目を言いつかって、我らの後を急ぎ追ってきたのだ
ジョフツ　新たな役目？
イソ　すげえよ、あんた、マジであそこから生き延びたのか、信じられねえなあ
ジョフツ　…よくぞ生きていてくださいました（握手をしようとし）

ハンサイ　…そんなことより急ぎ知らせねばならぬことがあって、全速力でこの船を追って来た

まもる　よくあっさり追いついたもんだよ。そっちの方が奇跡だ

ハンサイ　イソやん、フッさん…始皇帝が、崩御なされた

ジョフツ　え？

番無雨　そう言ってハンサイさんが一同に掲げたものは、始皇帝の死顔、精巧なデスマスクだった

ハンサイ　始皇帝が生前自ら作らせた己の墓。想像を超える巨大規模の地下宮廷には、実際の兵達の生き顔を寸分たがわず型取ったという何十万もの兵馬俑が並べられていた

番無雨　ハンサイさんが証としてもたらしたものは、その最新の技術によって作られたと思しき、かつてフッさんが見慣れた本物と寸分違わぬ、始皇帝の顔だった

イソ　…畜生！…

まもる　あまりのことに呆然としてすべての動きを止めてしまった一同をしり目に、最初に声を上げ、天を仰いで嗚咽にむせんだのは、船乗りの棟梁イソやんだった

イソ　間に合わなかったか！

3

三羽の鸚鵡が飛んできて、一軒の汚い小屋の屋根にとまる
そこは安生ばんばと呼ばれる老人の樹海の縁にある小屋
安生の家は様々な何なのかわからないモノで埋め尽くされており、一見ゴミ屋敷のようになっている
長老と世話役が訪ねてきている

三羽　間に合わなかったか。間に合わなかったか。間に合わなかったか
カゲマ　ルート1、いち
ヤミマ　ルート2、一夜一夜に人見頃
クラマ　ルート3、人並みにおごれや
三羽　ルート4、に。ルート5ルート5。不死山麓鸚鵡鳴
長老　…変な声で鳴くカラスだね
安生　そうかね
世話役　あれはカラスだよね？
安生　あれがカラスに見えるかい？
世話役　カラスじゃねえのか？
長老　ゴミためみたいな家だからよ、カラスが似合うと思ってよ
世話役　長老、言いすぎだ
長老　安生ばんば、あんた整理整頓ってものを覚えないな
安生　誰にも迷惑かけちゃおらんよ
長老　気持ちいいもんだぞ、整頓
安生　何しに来た長老？

長老　たまたま近くを通りかかったもんでな
安生　世話役と揃ってたまたまか？
世話役　…番さんとこの婆が行ったぞ
安生　ああ
長老　何で知ってる？
安生　こいつらが何でも教えてくれる（鸚鵡たちに餌をやる）
長老　何だよ、こいつらスパイか？
世話役　丹治のまもるも行った
安生　同い年だったようだな
長老　みんないなくなっていくな
世話役　仕方ない。こればっかりはルールだから
三羽　ルートゴルートゴ
安生　ルートニルートニ
三羽　ルートニルートニ
長老　おお、すげえしつけたな、まるで鸚鵡返しだ
安生　鸚鵡だからな
三羽　ルートニルートニ、ひとよひとよにひとみごろ
世話役　今のどういう意味だ？
安生　鳥の声に意味なんかねえよ。あくびみたいなもんだ
長老　おうむ…おうむ…大昔は生まれたばかりの赤子を、口減らしで山に捨てたそうだ。それじゃあんまりだってことで、いつか誰かが年寄りが行くことにルールを変えた
安生　仕事の邪魔なんだ。用がないなら帰ってくれないか
世話役　あんた、仕事って、ここで一人で引きこもって毎日何やってんのさ？

安生　言ったってどうせわからねえよ、おまえらなんかには、さあ帰れ帰れ
長老　あんたも来年だからな
安生　さあ行けって
長老　それを言いに来たんだ
世話役　身内が一人もいないとなると、俺達で色々段取らないといけないから
長老　それなりに準備をな
安生　おい、そこ踏むなよ、大事なシリョウなんだ
世話役　ゴミじゃないのかよ
長老　来年だからな、安生ばんば
安生　おまえもその次の年あたりだろ
長老　わかってるよ。でもお前が先だからな
世話役　また来る
安生　来んな
カゲマ　もう来んな
ヤミマ　二度と来んな
クラマ　死ぬまで来んな
三羽　来んな来んな

長老と世話役は去っていく

安生　行ったぞ

モノの山が動いて、中からいろりが出てくる

いろり　…かたじけない
安生　子供がいなくなったなんて一言も言わなかったぞ
いろり　親父がまだ家出に気づいていないんだ。あのバカ。四五日顔合わせないことだってしょっちゅうあるし
安生　おとっつぁん、仕事何やってんだ？
いろり　今は穴掘りだよ。よくわかんないけど、大昔の遺跡だか秘宝だかを探してるって。どっかの金持ちがアホみたいな額の懸賞金出したらしくて、あぶく銭目当ての山師が競って、麓のあちこちで人足を集めてる。
安生　隣の政さんも、みんな他の放り出して、もぐら競争だってよ
いろり　そうか。で、何で子供が一人でこんなところまで来た？
安生　まず全然子供じゃない。よく見て
いろり　ここから先に進んで、この小屋が見えなくなるところまで行っちまったら、もう樹海から生きて戻ってはこられない
安生　わかってる
いろり　危ないんだよ
安生　でも、もういい加減、全部捨てて出ていきたくなったんだ
三羽鸚鵡　命の外側へ、か？
いろり　そこまで勇気は出なかったけど
安生　ふうん。まあ、何があったか知らないが、似たような奴はたまに現れるな
いろり　忘れた頃にやってくる。忘れた頃にやってくる
安生　…そうなんだ
いろり　で、しばらくここで過ごして、また村へ戻っていく
安生　私は戻る気はない
いろり　…じゃあとりあえず手伝え

三羽鸚鵡　うぇーい
いろり　何をすればいい？おばあさんはどんな仕事をしているの？
安生　仕事じゃねえ。もっとヤバいことをやってる

安生と鸚鵡たちが立体の地図（人やモノによって構成される）を作る
それは山麓の樹海から不死山頂への登攀ルートの地図

三羽鸚鵡　富士山麓鸚鵡鳴
いろり　これは？
安生　さっき聞いた通りだ。俺は来年で八十になる。やそと読んでそれは、もう充分イナフ、お腹いっぱいということだ
いろり　つまり、お山へ行かなきゃならない年だ
安生　だが、まだまだやり残したことがある。お山へなんぞ断じて行かん
いろり　村のみんなが許さないよ
安生　俺のミションさえ達成できれば、もう誰も山へなんぞ行かなくてよくなるのだ
いろり　ミション？
安生　この山麓のどこかに必ずあるはずの、「ときじく」と呼ばれる不老不死の一角をこの手で探しあてる
いろり　ときじく？不老不死？
安生　その幻の一角には一本の木が生えていてな、その木になるという実が「ときじくのかくのこの実」
三羽鸚鵡（歌）　ときじくのかくのこの実
安生　その実を食せば、人の老いは時と共に凍り付き、永遠に命が続くのだと伝わる・・・ここまでわかるな
いろり　な、何となく・・・
安生　命が永遠に続くとなれば、そんな無限のポテンシャルをむざむざ人が捨てることはなくなる。自すとル

ールは変わる。老いというマイナス概念は消える。命というものの定義は書き換えられる。大変な変化が起こるだろう

いろり　そんなもの本当に…

安生　手掛かりが残されている。見ろ。ゴミではない。太古の時代より伝わる数々のシリョウの断片だ

いろり　シリョウ？

安生　(耳に近づけて)こうやって耳をすませば、何かの残像のような声が聞こえることがある。年月をかけて少しづつ採集してきた。その長年の研究をまとめた結果がこの3D地図だ

いろり　…あれが不死山…その山麓に広がる樹海…水のない樹海に船が浮いてる…そこからいくつも伸びてる白い線は？

安生　かつて船を下りて上陸したジョフツが不死山頂へ向かうのに辿ったと推測される五つのルートだ

カゲマ　ジョフツ？

ヤミマ　ルート1、位置異常なし

クラマ　ルート2、一夜一夜に人見頃、成果なし

安生　ルート3、人並みにおごれや、勝算なし

三羽鸚鵡　そしてこれがルート4、現実味なし。残ったのが今のところの本命…

安生　ルート5ルート5。すべての道は不死山頂に通ず。不死山麓鸚鵡鳴

いろり　大昔のことだ。秦の始皇帝の命を受け、不老不死の術を得るべく、秦国よりこの日本へ大船団とともに渡来した方士ジョフツは、始皇帝の死後も祖国へ戻ることなく、そのまま不死山の頂上にて自ら皇帝即位の封禅の儀式を行い、その途上で仙人より不老不死の一角の在りかを授かったと伝わる…その一角を特定するのだ

三羽鸚鵡　ルートゴルートゴ、不死山麓鸚鵡鳴

安生　おまえも探しに行け。シリョウは足元に転がっている。名前は？

いろり　丹治いろり

安生　ここでは第四の鸚鵡タジマとする
いろり　タジマ？
カゲマ　カゲマ
ヤミマ　ヤミマ
クラマ　クラマ
いろり　で、タジマ？
カゲマ　おっと、師匠！こいつは事件です！
安生　どうした？
ヤミマ　ルート5中間点南西五キロ地点にて異常瞬間熱量感知！
クラマ　熱源の正体不明！何なの？これって一体？
安生　速攻確認で！
三羽鸚鵡　速攻確認で！
安生　タジマ！
いろり　はい！
三羽鸚鵡　不死山麓鸚鳴
安生　タジマ、遅れてる！もう一回！
四羽鸚鵡　不死山麓鸚鵡鳴

丹治家では政、ひばりが行方不明になったいろりを心配して宗助を訪ねてきている

宗助　…全くよ、俺が毎日どんだけ汗水たらして、顔から何から真っ黒になって穴掘ってよ、なあ、政さんさ、何を探して掘ってんのか、それに何の意味があるのか、何もわかんないまま、朝から晩までひたすら闇雲に働き通してさ、そうやって死ぬほど働いて、ようやく細々と生きることが許されるわけだよね我々

は。そうやって俺が死ぬほど働いて、ようやく娘も生きることができるわけでしょ。それをさ、何考えてんだか。わかってねえよ。何が不満なのか。不満なんて、そんなもんいちいち気にしてたら生きていけねえんだよ。はぁ。何の役にも立たない小娘が、迷惑かけんのだけはいっちょ前で…本当に申し訳ない。この通り(ぞんざいに土下座する)

政　いや宗助さん、それは謝るとこではないですよ

宗助　どうかうちのことは気にせずに、現場に戻ってください

政　そういうわけにもいきませんよ

宗助　本当にあのバカが。どっかで野垂れ死んじまえばいいんだ

政　そんな言い方

宗助　すいません。どうせ気まぐれおこして、その辺ほっつき歩いてるだけなんですから

ひばり　でももう三日は姿を見ていないって、なあ

政　うん。こんなことは今までなかったから

宗助　この子があんまり心配するもんだから、それで今日は少しお話しをと

政　そんなことで、仕事まで休ませてしまって

宗助　こちらこそすいません。せっかくのお休みにおしかけて

ひばり　いやそれはまあ、いいんですけどね

宗助　何かの事件に巻き込まれてたら…

政　あのね、うちはそもそも放任主義なんですよ。ジジイの代からの伝統でね、二三日顔合わさないでも全然気にしない。親子だろうが、そこはそれぞれ勝手に生きりゃいい。気を使ってる余裕なんてどこにもないんですから

宗助　…でも…何かあったのかもしれません

ひばり　あったとしても、どうせ大したことじゃない。面倒くさい年ごろなだけですよ。放っときゃ帰ってくる

政　いろりん、爺ちゃんがいなくなって、その…何か様子が変わった感じがあって。いつも爺ちゃんと一緒に

宗助　いたから
いやそりゃ、つらいのはしょうがないよ。ひばりちゃんだって同じだろ。俺だって、政さんだって…でも
それをぐっと踏ん張って、こうやって必死で生きてんだからさ。あいつだけじゃないんだよ。そんなの
は！
政　いやいや、宗助さん
ひばり　ごめんなさい！私はその…ルールのことはよくわからなくて
宗助　怒ってるわけじゃないんだよ、ひばりちゃん、怒ってるようにみえたらごめん。怒ってたとしても、少な
くとも君に対してではないから
政　ちょっと手分けして探してみませんか？
宗助　そこまでしてもらうのは、さすがに申し訳なさすぎます
ひばり　いろりんがいつも行きそうなところは、いくつか探してみたけど
政　行きそうにないところもだ。普通なら
宗助　普通ならってどういうことです？
政　樹海の方も探してみませんか？
宗助　何であいつがそんなところへ？あそこは、死にたいやつしか近づかない場所ですよ
ひばり　え？
政　何か…我々にはわからないことが、あったのかもしれないし
宗助　絶対そんな大したことじゃないですよ
政　いや、宗助さん、父親のあなたにもわからないことが、あったのかもしれない
宗助　…そうですか。まあ、実際、この世はわからないことだらけですからな

美佐子が駆け込んでくる

美佐子　あなた！大変！
政　妻が駆け込んできて急を知らせた。私もひばりも宗助さんも、その瞬間、いろりちゃんに何かよくないことが起こったんじゃないかと咄嗟に想像して息を呑んだ…しかし妻が知らせたのは、穴掘りの現場でその日起こった事故のことだった。仔細は不明だったが、何でも現場で作業していた作業員全員が巻き込まれたのだという。私は結果的にいろりちゃんの失踪のおかげで災難から逃れたことになる。その時には宗助さんともども、崖崩れか何かを想像していたのだが、後日、知りえた噂によると、それは事故というよりは、実は不可解な事件であり、作業員たち全員の姿がことごとくどこかへ消え失せ、代わりに現場には、さながら猟師に捕えられて棒に吊るされた、猿か何かの獣のような、不気味な人形がいくつも転がっていたという

宗助　…何だよ、それ？
政　普段であれば、稼ぎ場が消えてしまったことへの皮肉の一つも言うところが、宗助さんは、いよいよ本気で心配になったのか、青ざめた顔で土下座をし、いろりちゃん探索への協力を私たちに頼みこんだ

事件の穴掘り現場
カラスが飛び回っている
人が大勢倒れている
身替り猿の人形を置いて人はいつのまにかいなくなる
安生といろり、鸚鵡が到着する

安生　…こりゃ、なんだ？
いろり　何があったんでしょう、師匠？
安生　どうだろうな…一概にはわからねえが…もしかしたらこの現場で…何かヤバいものを、うっかり掘り出しちまったのかもしれねえな

いろり　　ヤバいもの？

身代わり猿に耳をすます

いろり　　…師匠、何か、聞こえてきます（安生に人形を渡す）

安生　　しっ…

作業員が再び集まってくる（安生、いろり、鸚鵡達には見えない回想）

地面の一か所が光る。そこをのぞき込む（発見の瞬間）

鋭い金属音のような音

一斉に死のおたけびを上げながらもともと倒れていた位置（人形のもとへ）へ

雪の中、山道を歩いている番無雨とまもる

番無雨　　…今、何か聞こえたね

まもる　　そりゃ色々聞こえてんだよ

番無雨　　色々ってなんだ

まもる　　おまえの声とかな

番無雨　　そういうこと言ってんじゃないんだよ

まもる　　フッさんの声とかな

番無雨　　それは聞こえてんじゃなくて、思い出じゃないか？

まもる　　何が違うんだよ

番無雨　　そういうこと言ってんじゃないんだよ。今、何か、叫びみたいな声がしなかったか？

まもる
番無雨
まもる
番無雨
まもる
番無雨
まもる
番無雨
まもる

しなかったよ
たぶん耳が遠いんだよ、耄碌じじいめ。全然参考にならねえわ
それだけじゃなくて、他にも原因がいろいろあるのかもな
そんだけ見た目ボロボロじゃな
(雪を見て)…これ、もしかしたら寒いんじゃない？
当たり前だろ。凍えそうだよ。雪降ってんだぞ
あんまり寒くないんだよ
色々いかれてんな
でも死なないんだよ。何でだ？
まだそこ思い出せないのか？まもる？

## 4

古代

蓬莱国の内海を行くジョフツ一行の船は紀州熊野の浜まで来ている

ジョフツ　本当にそれでいいんですね、マモル

タジマモル　はい。フツさん

バンブウ　おまえ以外の子供はほとんど、フツさんと共に不死山を探す航海を続ける道を選んだんだぞ

タジマモル　意味がないことだから

イソ　マモルの言う通りだ。そんなことしても、もはや意味はない。始皇帝は崩御された。今更不死の山を見つけたところでもう遅い。そんなものはただの自己満足だ

ジョフツ　で、棟梁自ら、あきらめて船を下りると？

イソ　あきらめねえからこそ下りるんだ

バンブウ　何を

イソ　始皇帝の死をだ

ハンサイ　今となっては、我らの課題は不老不死ではなくなった

イソ　喫緊の課題は、死者の復活。死んだ始皇帝の復活だ

少し時間が戻る

現地人の女(縄文の巫女)が一行を訪ねてくる

番無雨　そこは後に熊野と呼ばれる無限の森に続く岸辺だった。始皇帝の死の知らせをハンサイさんから聞いて、これからどうするか結論の出ぬまま、船を停泊させていたずらに時が過ぎ、ある日、若くして杖をつい

た盲目の女が訪ねてきた。蓬莱の国の住人だった。カモツヌと名乗った女は、天のお告げを媒介する巫女だという

ジョフツ　どうしてここに？

カモツヌ　何かに呼ばれたのです

イソ　誰かこの人呼んだ？

全　（首をふる）

カモツヌ　何かに

イソ　何かですか？それは何ですか？

カモツヌ　いわば運命でしょうか

イソ　面倒くせえ匂いがするぞ

ハンサイ　だが、この未知の蓬莱国についての情報を得られるかもしれない

ジョフツ　あなたは不死の山を知っていますか？

カモツヌ　知りません

イソ　即答だな。知ってるみたいじゃないか

カモツヌ　山はいっぱいあるんですよ。どれが何とかいちいちわからないですよ

ハンサイ　この国には人はいるのか？

カモツヌ　いっぱいいます。私もそうです

イソ　わかるわ

ハンサイ　では、王のようなものはいるのか？

カモツヌ　いっぱいいます。私もそうです

イソ　何でもいっぱいなんだな

ハンサイ　君は王なのか？

イソ　王って意味が通じてるのかな

ジョフツ
カモツヌ
イソ
ジョフツ
イソ
ジョフツ
イソ
ジョフツ
マモル
ジョフツ
イソ
バンブウ
イソ
ジョフツ
カモツヌ
ハンサイ
カモツヌ
イソ
ハンサイ
イソ
カモツヌ
イソ
カモツヌ

あなたが呼ばれたという件に関して、もう少し具体的な説明ができませんか
え？具体的ってどういうことですか？具体的に教えてください
…とんちかよ
困りましたね
…フッさん、どうする？非常に怪しいが
バンブウ、何かおみやげを見繕ってあげなさい
おい、食べ物じゃなくていいからな。貴重なんだから
何か記念になるものでいいんじゃないか
貝殻とかならいっぱいあります
それでいいんじゃないか？きれいなヤツあれば
貝殻は別にこっちの国にもあるだろ
これ、誰かの遺品ですけど、木彫りのパンダですかね
木彫りのパンダはほぼ熊だな
そういう遺品はちょっとあれですね
(ハンサイの懐を指して)そこに何がありますか？
え？
それに呼ばれたのです。そこにあるそれに
ハンサイさん！
(懐に潜ませたものを恐る恐る取り出すと、始皇帝のデスマスク)
…まさか
(面を触って)あったかい
本当かよ？
無念の肉片がまだ内に残っている。そういうものを足がかりに、魂と肉体を再び現世に呼び戻す呪術が

あり、できます
この仮面から、始皇帝陛下を復活させることができるだと？
この仮面がそう強く望んでいます。大丈夫。できます。やるなら急ぎ出発しましょう。この術の成否は、時と場所が非常に大事になる。満月の夜にやります。しかるべき祈祷の場所まで、いくつか山を越えねばなりません
カモツヌを信じる者と信じない者とで、一行はまた二分の一に割れた。というより、内心では互いを信用しきれないハンサイさんとフッさんの間の疑心暗鬼と、始皇帝を宿すデスマスクを抱え込むハンサイさんの責任感がもたらした分裂だった

ハンサイ
カモツヌ

番無雨

冒頭の時間に戻る

ジョフツ
タジマモル
イソ
番無雨

まもる
番無雨

まもる
番無雨
まもる

本当にそれでいいんですね、マモル
意味がないことだから
喫緊の課題は、死者の復活。死んだ始皇帝の復活だ
マモル以外の子供たちのほとんどは、今や親代わりのようなフッさんと共に航海を続けることを選び、マモル、おまえは大好きなイソやんについていくことを選んだんだよ
ああ、そうだ。俺は実際イソやんの懐刀だったからな
しかし、イソやんは何であの時、フッさんについていかなかったんだろうね？何たってあの人は船の棟梁だ、なのに、なぜあえて船を下り、陸路の運命を選んだ？
そりゃはっきりしてる。イソやんは、あの異国の鬼女に魂抜かれちまったんだ
鬼女？
鬼の女。あいつはこの蓬莱じゃそう呼ばれて、土着の民の中でも孤立していたんだ。鬼道を操る恐ろしい女だって気持ち悪がられてな。色々普通じゃなかった。例えば羽があった。俺は何度も見たことがある

よ。あいつが黒い羽根を広げて、カラスみたいに空に舞い上がる姿を
アー！(羽を広げ空に飛びたつかのようなポーズ)
アー！
それを見て、イソやんも、別の意味で舞い上がってたよ
我々はカモツヌの案内で道なき森の木々を縫うように北を目指した。カモツヌが目指すのはかぐ山という山だった。丘を少し高くしたくらいのその小山の頂にて、満月の夜、カモツヌは、仮面復活の祈祷を行うという
だがそこへ行くまでに、いろんな邪魔者がいるらしいんだわ、このカラスが言うには

カモツヌ　カラスじゃないよぉ
イソ　カラスでいいじゃねえかよ、可愛くて。カモツヌって何かおまえ名前で損してるよ
まもる　じゃあイソやんだけはカラスでいいよぉ
ハンサイ　…邪魔者って、どんな奴らだ？
カモツヌ　土蜘蛛だ。あちこちの洞穴に住んでて、手足が蜘蛛のように長かったり、中にはしっぽが生えてるやつもいる

イソ　そういうのがうようよいるらしい
まもる　俺は思ってたね。どうなってんだ、この地域！
カモツヌ　怪物どもがうようよいるんだよ
まもる　おめえも大概怪物だろ！
イソ　だが総じて頭が単純で、性格は温厚、恩義に厚く、人を疑うということを知らないらしい
ハンサイ　めちゃめちゃいい奴らじゃないか？
カモツヌ　でもこのカモツヌの敵だ。奴らは自分達には理解できない私の力を害とみなし、排除しようと、隙あらば命を狙ってくる

ハンサイ　道を通してもらうだけなら、何とか話せばわかってもらえないかね？

カモツヌ　無駄だよ。私は本当に嫌われてるから
まもる　おめえ一体何してきたんだよ、今まで！
イソ　単体では大したことない連中でも、数の力ってのは馬鹿にできないからな
ハンサイ　どうする棟梁？
イソ　何とかして、そいつらを一か所に集められれば一気にまとめて…
カモツヌ　十把一からげにして一網打尽。その考え、気に入った
ハンサイ　イソやんは、カモツヌのためにそれを何とかやってのけた。山中を駆けずり回って、洞穴をいくつも巡っては、頭を下げ、敵対の意思のないことを説いて回り、その真摯で誠実な姿勢によって、土蜘蛛の民一人一人の信用を、時をかけて勝ち得ていった。船を下りてもさすが棟梁の器であった。ついにすべての土蜘蛛が一堂に会して、我らを正式に仲間に迎え入れるための盛大な宴が始まった。程よき酩酊が人々の顔にまんべんなく行きわたるまでさほどかからず、そのあとはカモツヌの仕事だった

マモル　これでもう、いいんじゃないですか、イソやん
イソ　何言ってるんだ、まもる？詰めを誤れば、すべてが水の泡だぞ
マモル　その詰めがもはや必要ですかね？結果的に平和で友好な関係を築けたんだ。彼らは同盟者です。むしろここから一緒に歩んでいける仲間ができたと…
カモツヌ　時が満ちた…月が呼んでいる（ハンサイの懐から始皇帝の仮面をかすめ取る）
ハンサイ　おい！
カモツヌ　（巫女の仮面をつけ羽を広げて舞う）

土蜘蛛の民はカモツヌの剣舞に喝采を送るが、カモツヌは舞いながら油断した彼らをまとめて殺していく

ハンサイ　血飛沫が雲となって辺りを包み、その赤い雲が上空へ流れて散っていくと、その奥から完璧と言っていい金色の満月が姿を見せる

カモツヌ　今ぞ！
ハンサイ　そう言ってカモツヌは一息にかぐ山の頂に駆け上り、そのまま儀式を始めた

唄(カモツヌ)　カモツヌは　三本足のヤタガラス
生えてくる　種なき命が生えてくる
信じられない奇跡の技

土蜘蛛の死体が徐々に地中に栄養分として吸い込まれていく
カモツヌが枝などで人の骨格を作り、頭のところに始皇帝の仮面をつけてかかしのように地面に刺す
すると土が生えるように湧き上がり肉のように骨格にへばりついて人の形になって動きだす(人形)

ハンサイ　これを…復活した始皇帝陛下とみなすのというのか…
カモツヌ　はい
マモル　でもこれは…人じゃないでしょ
イソ　まあ…馬子にも衣装っていうだろ。立派な服着させればそれなりになるかもしれない
ハンサイ　それなりに用意していた秦国風の派手めの装束に即席の王冠をまとわせると、確かに何らかの雰囲気は醸し出る。何せこの仮面は始皇帝の死に顔そのものを型取ったものだ。無表情でも、まごうことなきあの恐るべき稀代の英雄の面影が息づいていることに間違いはない

カモツヌ　可愛いだろ
イソ　可愛いとかじゃねえよ
カモツヌ　どうしたんだよイソやん？
イソ　いや、何せ、実際の始皇帝を見たことがあるのは、こん中じゃハンサイさんだけだからな。こいつがいかほどのものか、判別つきかねるというか、何というか。どう接すればいいのか、だいたい、何て呼べばいい

カモツヌ　んだ？
イソ　初めて子を持つ父親はみんなそうやって戸惑うもんだよ
カモツヌ　父親？
イソ　この子は私とあんたの子だ、イソやん
カモツヌ　おまえそれは飛躍だな
イソ　この子の人生は、すでにそれだけ飛躍した高みから始まるんだよ
カモツヌ　まずこの子って感じに全く思えないけど
イソ　イソやんの子だから、この子はイソジンだ
マモル　いやいや。勢いで決めないで、ちょっとゆっくり考えようよ
ハンサイ　でもイソジンって…なんか、宇宙人みたいで、俺は距離感しっくりきますね
カモツヌ　確かにイソジンは宇宙人のように我々の言葉を話すことができなかった言葉は必要ない。この子の考えることは母親である私が全部わかるから

イソジンが奇妙な動きを見せる

イソ　怖いな…
マモル　駄目ですよ、イソやん、この子をそんな風に見ちゃ
イソ　…まあ、見方次第では可愛いのかもしれないけど…どうもこれじゃあ、こいつ、これからどうする…
カモツヌ　馬子にも衣装！
イソ　は？
カモツヌ　あんたの言った、私の大好きな言葉だよ、イソやん
イソ　え？それ何で好きになった？
カモツヌ　イソジンにはまだその衣装が足りないのだ。始皇帝の化身となるための衣装が

ハンサイ　これ以上に上等な服は今は用意できないぞ
カモツヌ　服の話じゃない。国の話だ阿呆め
ハンサイ　あほめ？
イソ　国？
カモツヌ　イソジンが名実ともに始皇帝として復活するためには、君臨するべき帝国という衣装をまとうことが必要なんだよ
ハンサイ　秦帝国を衣装にたとえたか？
イソ　なるほど、ここには国がないから、イソジンはどうしたって始皇帝に思えないのか
ハンサイ　では秦国へ戻れというのか
カモツヌ　アー！(飛び上がり高みから四方を見渡し)とりあえずここでいいんじゃない？
ハンサイ　は？
イソ　この蓬莱国に巣喰う種々雑多な土蜘蛛どもを隅々まで征服し尽くし、ここにあらためて帝国を作るのだ。そうして初めてイソジンは始皇帝の蘇りに達することができるだろう
カモツヌ　高らかにそう宣言したカラスの見えないはずの目は、空の高みよりはるか遠くを見通していたのかもしれない…
イソ　おい待て待て、さすがに話が飛躍しすぎちゃいないか？俺はそもそも船乗りでハンサイさんだって所詮木っ端役人だぞ。どうやってそんな大それたことができるっていうんだよ
カモツヌ　この子の人生は、すでにそれだけ飛躍した高みから始まっている
イソ　気持ちはわかるけどカラス…
カモツヌ　十把一からげにして一網打尽。私の大好きな、あんたの言葉だよ、イソやん
イソ　それはお前が言った言葉なんだよ、カラス…

ポンという音と共にイソジンの身体から仮面がはがれ落ちる

面がはがれたのっぺらぼうの肉体が、動かぬ赤い人形(身代わり猿)となって転がる

イソ　何！何今の何？何が起こった！
マモル　イソジン？
カモツヌ　(仮面を拾いながら)賞味期限だ
イソ　何の賞味期限
カモツヌ　私の呪術には時間的な限界がある
ハンサイ　つまりこれで、イソジン寿命ってこと？
カモツヌ　うん
ハンサイ　ええ…
カモツヌ　はい、どんどっぴ(赤い人形を投げ捨てる)
イソ　っていくら何でも短いよ、カラス
カモツヌ　そうなの。短いの。ごめんなさい。でも回数の限界はないからそれで許して
イソ　は？
カモツヌ　繰り返せばいいんです。繰り返し繰り返し、イソジンの肉体を捏ね上げ、紡ぎ繋ぎ続ければいい。つまりこれは脱皮のようなものと思えばいい。人と同じ。こうして古い自分を脱ぎ捨てていくことで、少しづつ時を重ねて成長していく

言いながらカモツヌが再び枝などで人の骨格を作り、頭のところに始皇帝の仮面をつけてかかしのように地面に刺す
すると土が生えるように湧き上がり肉のように骨格にへばりついて人の形になっていくが、前回よりは細くて心もとない

イソ　…ちっちゃくなっちゃった
カモツヌ　…血が足りないよぉ。犠牲が足りないよぉ。死が足りないよぉ。お父おさぁん

イソ　…そういうことかよ
ハンサイ　こうしてイソジンの肉体を維持するために、途絶えることなく土蜘蛛の民を殺していく、戦に次ぐ戦の血みどろの日々が始まった。そしてそれは同時に、この未開で多様な蓬莱の地を、始皇帝を頂とする帝国にまとめ上げていく王道のルートであった

イソジンが縦横無尽に土蜘蛛を倒してゆく戦の景
一方海岸沿いをさらに東へ進んだジョフツの船はついに不死山を発見する

バンブウ　フッさん！
ジョフツ　あったか…本当にあったか
バンブウ　あれっすか！不死山！
ジョフツ　あったかぁぁぁ

## 5

真夜中の山道
どこかへ向かい続けている番無雨とたじまもる

まもる　おい
番無雨　何だよ
まもる　どこ行くんだよ？
番無雨　決まってんだろ
まもる　どこだよ
番無雨　だから、決まってんだよ、行くところは。そんなことも思い出せねえのか、おまえは？救いがたいな
まもる　そんなことよりよ、見ろよ、俺の体をよ
番無雨　何だよ
まもる　ついていけねえよ
番無雨　ついて来てんじゃねえか
まもる　ギリギリのとこなんだよ
番無雨　じゃあ永遠にそのままだ。じっとしてなよ。そこの石みてえなもんになりゃいい。そのまま石になっちまえばいい。人面石だ。気色悪いな
まもる　気色悪いか
番無雨　気色悪いよ。誰も近づかねえよ
まもる　誰も近づかねえか
番無雨　そうだ。誰も近づかねえのに、ずっとおまえは生きなきゃいけないんだよ。どんだけ孤独でも逃げだせねえぞ。何せ石だからな

まもる　ああ！そんなの嫌だ！そんなの寂しくて死んじまう！
番無雨　だから、そもそも死ねないんだよ、私らは。何もかも忘れちまいやがって、面倒くせえな
まもる　おまえは石になっても平気なのか？
番無雨　ならねえよ
まもる　石にならねえで、どうなるんだ？
番無雨　だから
まもる　どうなるんだ？
番無雨　だから…どっちかっていうと草花みたいなな
まもる　草花になるのか？
番無雨　まあ例えばだ。咄嗟にうまく言えねえんだよ
まもる　石でも草花でも一緒だろ
番無雨　だいぶ違うだろ
まもる　一緒だよ。俺は人間でいたいんだよ
番無雨　知らねえよ！おめえの思うように都合よくできてねえんだ、この世は！
まもる　不都合だあ！不都合だあ！
番無雨　おめえとしゃべってると疲れるわ…何か必要以上に吸い取られるわ（周りを指さしたりする動作をキビキビとしだす）
まもる　何やってんだ？
番無雨　…不死山の頂上…七谷の烏帽子岩…北斗七星、からの北辰、北極星…（それぞれを指さす）
まもる　そ、それは！
番無雨　思い出したか？一緒にイソやんに習った航海術だ
まもる　今どこにいるのかを割り出す！
番無雨　時代によって風景は変わるし、年を経るとおめえみたいに記憶はあやふやになる。この不変の物差しを

いつも頭の隅っこに忍ばせておかないと、永遠の軒下に無残に置き去りにされちまうんだ…そうか。わかった。前来た時より、こっち側の崖が削れてんだ。嵐か何かで派手に崩れたんだな。それで谷が埋まって見落としてたんだ…

まもる　どこ行くつもりだ？

番無雨　いつものところさ

まもる　決まってんのか

番無雨　決まってんのさ

まもる　前にも来たのか

番無雨　何度も来てるよ

まもる　一緒にか

番無雨　一緒にだよ

まもる　一体さ、俺はお前の何なのさ？

番無雨　…今から行く場所を知る、たった二人のご縁だよ

いろりを探して、安生ばんばの家の近くに訪ねてくる宗助、政、ひばり

宗助　こんなとこまで探す必要あんのかな

ひばり　だって、いろりちゃんはまだ見つかってないんですよ、お父さん

宗助　でもだからって、こんな家まで、さすがにね

ひばり　めちゃめちゃ手がかりありそうじゃないですか。この辺りには他には誰も住んでないし

政　ひばり、おまえはいいから黙ってなさい

ひばり　え？何で？

政　おまえは向こうで待ってろ。お父さんたちが行ってくるから

ひばり　え？何で？
宗助　行く必要あんのかな、政さん？
政　いや、そこはひばりの言う通り、むしろいろりちゃんの手がかりが得られるかもしれないでしょう
宗助　でもここは…
政　ご心配はもっともです。でも、確かにここは樹海へのルートの一つにあたりますし。何か情報が…
宗助　ここに住んでるヤツのことは、わかってるよね
政　はい。実は…全く知らない仲でもないんですが
宗助　え？知り合いなの？安生ばんばと？
政　少しです
宗助　そっかぁ
政　だから何がどうってことじゃないんですよ
宗助　いや、そうだけどさ…どう反応していいか
ひばり　どういう人がいるんですか？
宗助　つまり…
政　普通の人だったんですよ、昔は。それは確かに
宗助　え？どういう関係なの？
政　いや…全然大した話じゃないんですよ
宗助　どんな話なの？
政　だからですね
ひばり　お父さん？
政　その、つまり…昔ね…あの人が、山で変なアレを聞いたってなって、おかしくなっちまって…
ひばり　変なアレって？
宗助　声だよ

ひばり　声？
宗助　仙人の声
ひばり　仙人！
政　たまたま同じ現場で働いてたことがあってね。あの人は、もうそろそろ両親を山に連れて行かなきゃなんねえ年だっていうんで、それでひどく悩んでて仕事も手につかなかったが、とうとうその父母まとめてルールの刻限が来ちまった。仕方ねえから女だてらに二人を背負って、あの人は山へ入ったんだ
宗助　それでおかしくなっちまった。よくある話じゃないか
政　下りてきて、四五日は何もしゃべらずに、黙々と働いてた。こっちも何も話しかけなかった。それが、ある日突然、俺の耳元でこう言った…生贄だって
ひばり　生贄？
政　山へ捨てられる爺婆は生贄なんだって。じゃあ、その生贄と引き換えに、一体我々は何を望んでいるのかって
宗助　…ふん…そりゃあいつが言った言葉か？それとも山の主の仙人様の受け売りかい？ひばりちゃん、まともに聞いてたらバカバカしいだけだよ。きっと親を捨てる葛藤のあまり、心が折れちまっただけのことだ
ひばり　宗助おじさんにはその葛藤はなかったの？
宗助　え？
ひばり　お父さんにはその葛藤はなかったの？
政　…ひばり
ひばり　心は折れなかったの？
宗助　…そうだね。だから仙人様の声も聞こえなかったのかもな
政　…あれは、不老不死のための生贄なんだ
宗助　不老不死？

政　仙人様がそう言ったって、あの人は、俺にだけ、こっそり教えてくれたんだ。どういうわけか。話したいタイミングでたまたま傍にいたからか、話しかけやすかったのか、何なのか。今でもその時のことが忘れられなくてね

ひばり　じゃあお父さんも山の仙人様の声を聞いたってことになるね

政　…ひばり、山に仙人様なんていない。それは覚えておかないといけない。誰にもそんなことしゃべるもんじゃないよ

ひばり　何で？

宗助　まあともかく、だったら、まずは政さんが行ってくださいよ

政　え？…はい。そうですね。どれだけ僕のこと覚えてるかわからないけど

宗助　それでも、くれぐれも、ね。気をつけて。何しでかすか、あれだから

安生の小屋に単身入っていく政

安生　…おう、どういう風の吹き回しだ？

政　覚えてますか、安生ばんば

安生　久しぶりだな

政　…ちょっとその辺まで来たもんで

安生　ちょっとだけでその辺まで来ねえだろ

政　そうですね

安生　…婆がいたよな。息災か？

政　それがですね

安生　知ってるよ

政　え？ご存じでしたか

安生　…大変だったな
政　いや、それはもう、そういうルールですから
安生　ルールって言い方がおかしいんだよ
政　…難しい話はわかんねえから
安生　何も難しい話じゃねえ。そうやって逃げてちゃ、一生わからねえよ
政　…実は聞きたいことがあって
安生　丹治の家のいろりのことだろ
政　え？わかるんですか？
安生　俺は何でも知ってる。鸚鵡どもが目を光らせてるからな。鵜飼の鵜みてえにな、空から情報を漁ってくる
政　今どこに？
安生　安心しろ。無事だ。俺が保証する。だからそれ以上聞くな。放っておいてやれ
政　でもそれじゃ、父親が納得しない
安生　納得させろ。おまえが
政　しかし…
安生　…政、人の一生を変えるにはな、まず疑問を持つことだよ
政　…疑問？
安生　疑問を持つといろんなものが見えてくる。いろんな声が聞こえてくる。例えばこれ(シリョウ)だ。おまえ、ここに何か落ちてるって、今言われるまで思ってなかったろ？見えてなかったんだよ。ところでこれは何だ？
政　えっと…
安生　うまく言葉にできないだろ。初めて見たもんだからな。ちなみに俺はこういうものをシリョウと呼んでる。勝手に名付けたんだ。初めて見えたものは自分で名付けるしかねえ。でもこいつは名付けるずっと

前からここにあったんだ。もしかしたら大昔から。でも名付けるまでは見えなかった。ここにあるのに見えなかったんだ。こいつは時の痕跡だよ。疑問を持つことで、そんな痕跡にいくつも出会う。世の中にはそんな痕跡が溢れて解読を待っている。なのにお前たちは、見ようとも聞こうともしない

政　はあ…じゃあ山の仙人様もそういう痕跡の…

安生　ジョフツな

政　ジョフツ？

安生　この不死の山の主だ

政　ヌシ？

安生　ジョフツはいろんな痕跡をこの地に残した。そのすべてが不老不死の夢に繋がっている

政　はあ…ところで、その、いろりちゃんのことですが…

安生　あの子にもいろんなものが見えちまったんだ…生き方、死に方。命の行く末。そうなったら仕方ない。しばらくは俺みたいに熱病に浮かされて生きるしかないんだよ

いろりがカゲマ、ヤミマ、クラマを振りほどいてシリョウを抱えて入ってくる

いろり　師匠！

安生　表に出てくんなって言ったろうが

カゲマ　すいません！タジマ戻れバカヤロウ

ヤミマ　バカヤロウ

クラマ　バカヤロウ

政　いろりちゃん…

いろり　政さん

政　よかった、無事で

安生　これでわかったろ、さあ、とっとと消えろ
政　いろりちゃん、お父さんもそこまで来てるんだよ
いろり　え？
安生　会わせねえよ
政　お父さん、心配してるよ
いろり　そうですか
安生　とっとと行けって、政
政　いろりちゃん、無事だって伝えておくから
いろり　すいません
安生　で、おまえも何なんだよ、血相変えて、何にしたって時をわきまえろってよ、いつも言ってんだろ
いろり　すいません、師匠、しかし、これ、この埋もれていたシリョウなんですけど…
政　いろりちゃん、俺は気持ちわかってるからね
安生　まだいたのか、おまえ
政　応援してるから
安生　仕事の邪魔だよ
政　俺も見たから、七谷で…
いろり　…え？
政　でもお父さんを責めちゃ駄目だよ。俺も同じだ。みんな同じだ。老いたもんは行かなきゃならねえ。それは順番だ。それはルールだ
安生　おい、こいつ追い出せ
カゲマ　こいつ追い出せ
ヤミマ　こいつ追い出せ
クラマ　お疲れ様でございました。お疲れ様でございました

政は出ていった体を装い、また戻ってきて様子を見ている

安生　話の続きだ、タジマ
いろり　どこまで話しましたっけ？
安生　まだ始まってもいねえよ
いろり　そうでした、このシリョウ。ほとんど解読が困難ですが…
安生　ん？何が聞こえる？
いろり　…わかりにくいんですが、仮面みたいなものを地面に…
安生　(聞きながら)仮面…埋めた…封印したってことか…

ひばりが走りこんでくる

ひばり　お父さん！
いろり　ひばりん！
ひばり　いろりん！
政　おまえ…
ひばり　そ、そ、宗助さんが！

咄嗟に走り出すひばり、政、安生、いろり、三羽鸚鵡
倒れている宗助のもとに皆が駆け付ける

政　我々が駆け付けた時にはもう、宗助さんの姿はなく、そこには血の付いた、見慣れた作業帽だけが残さ

れていた。ひばりの話によれば、突然仮面をつけた影のようなものが林の奥から現れ、私が戻るのを待っていたひばりと宗助さんに襲い掛かったのだという。宗助さんはひばりをかばうように、そいつと組み合い、命がけで時を稼いで、ひばりを逃がしたのだった…

宗助の声(回想)　「走れ！走ってお父さんに知らせるんだ！」

カゲマが(身代わり猿)人形を拾い、安生に見せる

カゲマ　師匠

ヤミマ　これ！

クラマ　これ一体何なんでしょう

安生　…臨戦態勢

三羽鸚鵡　臨戦態勢！臨戦態勢(飛び散っていく)

政　いろりちゃん…

いろり　…しょうがねえ…バチが当たったんだよ

## 6

依然としてどこかへ向かっている番無雨とたじまもる
古代の風景　不死山に到着して船を下り、山の頂へとたどり着いたジョフツ一行

番無雨　…フッさんと私たち、ここまで生き残った童たちは、不死の山にとうとう辿りついて船を下り、樹海を抜けてその頂へと登った。美しき孤高の峰の周りには何一つ遮るものはない。見渡す限り山々が連なる蓬莱国の東方眼下には、薄い雲を透かして、どこまでも続く平原広沢の大地が広がっていた。フッさんはそこで封禅の儀式を執り行って天地を祀り、自ら大地のヌシとなることを宣して、大平原に新たな国を打ち建てた。それは始皇帝に無残に滅ぼされた斉国の復活、学問を信じたフッさんの一族たちが、夢見た理想郷の具現化だった

ジョフツ　私が何故、あなたたち年端もゆかぬ若者たちをここへ連れてきたか、わかりますか

バンブウ　海を渡るための生贄ではなかったのですか？

ジョフツ　そんな酷いことを私が本気で実行に移すと思いますか？

バンブウ　ではこれも、始皇帝を欺くフッさんお得意の口八丁？

ジョフツ　全然得意でも何でもないが

バンブウ　私たちの命は、不老不死と引き換えではなかったのですか？

ジョフツ　それは当たらずといえども遠からず

バンブウ　どうもフッさんの考えはわからんなあ

ジョフツ　秘術の種です（種を見せる）

バンブウ　何ですか？

ジョフツ　この蓬莱国には伝わっていない五穀の実。草木の苗、人の生きる糧となるものの種です。航海の途中でだいぶ失ったがまだ少しはこの手に残っている

バンブウ　これが一体…

ジョフツ　あなたたち若者がここに国を作るのです。家族をつくり、この種を大地に撒いて、耕し、育て、その豊かな実りを糧に年を重ねて命の物語を紡ぐ。やがてこの世を去り行く前に、物語の続きを担う若者達にすべてを伝えて、命の先を託す。これこそが不老不死の秘術。国という名の永遠だ

バンブウ　では不老不死の仙人様というのは…？

ジョフツ　そんなものは、はじめっからどこにもいない

番無雨　でもいたんだ！ウッさんこそが、その、仙人様だった

まもる　ちょうどその頃俺は…その頃はたぶん…たぶんちょうど…たぶん、あれしてたな…

不死山の西はるか　戦の真っただ中にいるハンサイ、イソジン、イソ、マモル

ハンサイ　ちょうどその頃、仮面の皇帝イソジンによる継ぎ接ぎの王道は、のっぺらぼうの抜け殻をまき散らしながら、然るべき帝国という衣をまとうべく拡大の一途をたどっていた。カモツヌの霊力とイソやんの勘所、そこに不肖私ハンサイの事務処理能力も加わり、血生臭き進軍は畏れを知らず、十把ひとからげに土蜘蛛を掌握し、国と呼んでもはばからぬ広大な縄張りを、さらに未開の東へと広げんとした頃には、もうこの異国に来てから何年の時が流れたものか…夢中で過ごした時はあっという間にすぎるというけれど…ふと水面に映る髪にはずいぶん白いものが混じったものだな…

川べりで疲れをいやす一同

イソが老いたカモツヌの肩を抱えて現れる。イソも疲れた感じで年を取っている

カモツヌ　ああ…

イソ　水飲むか？

カモツヌ　いらん
イソ　飲める時に飲んどけよ
カモツヌ　水はいらんが…少し休む。それくらいのことはいいだろ？
イソ　いいよ、休もう

カモツヌは石の上に腰を下ろしもうぼろくなった自分の羽のようなものを自分で繕う

イソ　手伝おうか
カモツヌ　触るな
イソ　はいはい
カモツヌ　…あぁ…見てよこれ。ボロボロだよ…
イソ　…もうその羽みたいなのさ、いらないんじゃない？だいぶ使ってないんだから
カモツヌ　…飛べないカラスはただのカラスだ
イソ　え？なんて言った？
カモツヌ　…前は一日寝れば、艶が戻ったもんだよ
イソ　何だって時が経てば劣化するんだ
カモツヌ　これじゃあ、イソジンの足手まといになるだけじゃないか
イソ　もうあいつは一人で大丈夫だよ。まかせておけばいい。さすが始皇帝の念が入ってるよ。前に突き進むことに迷いがねえ。道なき道に血路を開き、文字通り、あいつの行くところに道が出来ていく。未開の島に王道が敷かれていく。そしてあいつは、疲れることを知らねえ…

イソジンが元気が有り余って激しく飛び跳ね踊っている

イソ　…絶好調だな
カモツヌ　でもイソやん、私が倒れたとしたら、どうするの？
イソ　縁起でもねえこと言ってんじゃねえよ
カモツヌ　私がいなくなったら、あの子の新たな身体の依り代を誰が作れるっていうんだよ？
イソ　今からそんなこと考えてもしょうがねえって
カモツヌ　脱皮の時期が来ても、次の身体がなかったらさ
イソ　…
マモル　(少し離れた高台で景色を見ていた)イソやーん！
イソ　どうしたマモル？
マモル　東にすげえ大きな山が見えます。ほらあそこ。他の山々より頭八つは抜きんでて、雲より高く、たった一つで天に届きそうだ。この島に来てから見たどの山とも全然違う。存在感がダンチです
イソ　…ダンチ…まさか…
ハンサイ　うん。かもしれない
イソ　もしかして、不死の山なのか？
まもる　そうだった。それがフッさんの目指した不死の山だった。俺が最初に見つけたんだ。俺たちは、途中で船を降りたが、何年もかけて結局陸路でその山に辿り着いたんだった…

巨大な不死山が目の前に迫る
イソジンは声にならない雄たけびを上げて痙攣し、そのまま脱皮して(身代わり猿)人形が捨てられる

カモツヌ　…どんどっぴ
全　どんどっぴ
ハンサイ　その不死の山を挟んで、東側には、すでに一つの大きな国があった

番無雨　平原広沢の大地に、フッさんが作った、不老不死の国だった
イソ　不老不死の国？
ハンサイ　ああ。そう言われてるらしい
イソ　ってことは、フッさんが・・・
ハンサイ　その可能性はある
イソ　あの不死の山にたどり着いて、本当に不老不死の術を手に入れちまったのか？
ハンサイ　そして不滅の仙人として君臨しているのかもしれない。王国の支配は東方の奥地にまで、その権威のおよぶ範囲はかなり広大だという
カモツヌ　不死の山を挟んで、天下分け目の決戦というわけだな

カモツヌはまた始皇帝の仮面を棒に突き刺し、土を湧きあがらせてイソジン復活の儀式を行うが、復活したイソジンは細くしなびている

イソ　いや、待て待てカラス。相手がフッさんや、ついてったあいつらだとすれば、敵じゃない。行く道は分かれたが、共に不死の山を目指した仲間だ。時はかかっちまったが、ここで合流できれば、めでたいことじゃないか
カモツヌ　何言ってる？イソジンの延命には血が必要だ。そうでなくては仮の肉体がもたない。相応の血が流れないともたないのだ
ハンサイ　確かにな
イソ　だからってあいつらとぶつかることはありえないだろ、なあマモル
マモル　バンブウもいるのかな？
イソ　一人残らず無事だと信じたいがな
カモツヌ　そもそもおまえたちは何のためにこの島に来たんだよ？
ハンサイ　それは始皇帝陛下の不老不死・・・

イソ　だけど始皇帝は死んだんだし…
ハンサイ　すなわち今それは、その死顔を表に映すイソジンの延命と同義である
イソ　ハンサイさん、待ってくれよ
ハンサイ　イソやん、私の心底は、今でも、あくまで任務に忠実な秦国の役人なのだ
イソ　じゃああんた、フッさんと戦するつもりか？
カモツヌ　…
イソ　その…おっさん？
カモツヌ　フッさんだ。ジョフツさんだ。一度会ったよな
ハンサイ　そのジョフツさんは本当に不老不死を手に入れたのか？
カモツヌ　さだかにはわからないが、あの山が本当に伝説の不死の山だとすれば…
イソ　ところでジョフツさんっていうのは男だったかな？女だったかな？
ハンサイ　男に決まってんだろ。この未曾有の大計画を一人で仕切った大人物だぞ
イソ　いや…そうとも限らん
ハンサイ　え？だって髭生やしてなかった？
イソ　不自然で怪しい髭だった
ハンサイ　いやでもさ…
イソ　ジョフツの正体がとある女性ではないかという噂は実際あったのだ
ハンサイ　何？
カモツヌ　始皇帝陛下が執着して追いかけた、斉国の王族の生き残りの姫君ではないかとな…
　女だとすれば、イソジンとめあわせる道もあり…その身体が本当に不変不滅を実現しているのなら、
　湧き上がっては滅び続けるイソジンの継ぎ接ぎの命に、永遠の息吹を吹き込めるかもしれない
イソ　カラス…
カモツヌ　これこそあの子が助かる天啓かもしれないよ、イソやん、このカラスの命運が尽きる前に、ジョフツの国

を制圧し、その女を力ごと奪い取るんだ。私たち二人の希望の子イソジンが、私たちの死んだ後も、いつまでも始皇帝の顔として、この先千年二千年の時を生き長らえられるようにさ

マモル　イソやん、カラスは一体何言ってんだ？イソやんにはわかるのか？

イソ　ああ…腐っても俺たちは…家族だからな

ジョフツ一行は不死山の頂から、鳴り物を鳴らして西から山腹に迫るイソジン率いる軍勢を見ている

番無雨　…その大戦の戦端が開かれんとする間際まで、まさか西から攻めてきた敵の大将があのイソやんだったなんて想像もしなかった

ジョフツ　敵軍の先頭に立つ小さき者の顔が見えますか？

バンブウ　えっと…

ジョフツ　…あれは始皇帝だ…

バンブウ　その死に顔をかたどった遺品の仮面ですよ。大昔にハンサイさんが船に届けた

ジョフツ　畏れというものを知らぬ亡者の顔だ

番無雨　フッさんの一生は、あらゆる意味で、その脅威からの命がけの逃避行だったんだ

バンブウ　始皇帝はとっくに死んだんですよね

ジョフツ　あれは悪霊だ

バンブウ　悪霊？

ジョフツ　何度かき消しても、この脳裏から消えることがない。いつまでもこの身を追いかけてくる。あの恐ろしき面影は永遠に属するもの…

番無雨　その時、フッさんの脳裏に浮かんでいたであろう、かつてその畏れを知らぬ暴君によってもたらされた、血に染まる破壊の傷跡、残酷無慈悲な現実の歴史の風景を、私たちは想像することすらできない…

かつての始皇帝とその手による血塗られた侵攻、虐殺の光景がジョフツの脳内にフラッシュバックする

バンブウ　フッさん…

ジョフツ　…今となっては、どれだけ遠く離れた場所の出来事であっても、今となっては、どれだけ遠く離れた時代の出来事であっても、それは、今ここに繋がる、永遠の時のどこかで現実に起こったことです。もしその禍根が永遠に属するものであるならば、どこまで行ってもこの命がけの逃避行に終わりはない…その禍根を鋭利な刃でフッツと断ち切り、畏れを知らぬ衝動を、天罰という畏れをもって押し返す。この永遠の時の外、ときじくの一角より、いかなる一瞬も逃さずに、にらみをきかす…この世には、神という存在が必要だ

不意に番無雨とまもるは、ある静かで小さな一角に到着する

一本の木が生えていて橘の実が一つなっている

番無雨　さあ、着いたよ

まもる　着いた？ここ、どこだよ？

番無雨　フッさんが眠る、ときじくの一角だ

7

安生ばんばが宗助の墓を擬して棒を立て、そこに作業棒をひっかける

政　…いろりちゃん、お別れを
ひばり　いやまだおじさんはどこかで生きているのかもしれないんだし
政　まあそうなんだけど…
いろり　師匠、ありがとうございます
政　いろりちゃん…
安生　…かつてこの不死山をシンボルにして築かれたジョフツの国は、後のこの国の大王家の軍勢に攻め込まれて一瞬で敗れた。先頭に立っていた武者は、背丈は低いが恐ろしい仮面をつけて、獣のように獰猛であったというシリョウがある
政　仮面の獣？そいつが昔も現れてたってこと？
安生　そしてその仮面を封印したってシリョウもある。いつの時代のことかわからんが
政　もしかすると、掘り返しちゃいけないものを、表に出してしまったのかもしれない…
安生　悪霊…
政　え？
安生　山の仙人がそう言ったのを、かつて聞いたような気がするんだ

カゲマ、ヤミマ、クラマが美佐子を連れてくる

美佐子　ひばり！
ひばり　お母さん！

政　無事だったか、よかった
美佐子　あらましは聞いたんだけど、何が何だかわけわかんなくて。穴掘りの現場のことと関係あるの？
政　たぶん。とにかく一人でいるのは危険だ。大変な化け物がこの近所に野放しになってるのかもしれない
美佐子　いろりちゃん…お父さん…
いろり　バチが当たったんです
ひばり　またそれを言う
いろり　まもるを酷い目に合わせたバチが
政　それはだから、ルールのせいだよ。宗助さんだけじゃない。誰だって…ああいうことになっちまうこともありえる。仕方ないんだって
いろり　いや、ダメですよ、やっぱり、バチ当たりだ
安生　タジマ
いろり　あ、はい
安生　…ジョフツの国はこの不死の裾野を遥かに越えて広大だった
いろり　はい？
安生　そしてそれを滅ぼそうと攻め込んできた軍勢も半端な数じゃなかったはずだ。不死山を挟んで天下分け目の東西決戦となれば、それはきっと大戦になって、夥しい血が流されただろう。ところがそんな戦のことはどこのシリョウを探しても、欠片も残っていない。どうしてだ、カゲマ？
カゲマ　はい師匠、戦は恐らく行われなかったからです。ヌシであるジョフツは戦わずにその国をそっくり譲り渡したと考えられます
政　抗うことなく、白旗上げて侵略に屈したってわけか？
安生　そうだ。ただし一つだけ条件を付けた
ヤミマ　不死の山からは遥か西方の彼方、日の沈みゆく地の果てに流されたジョフツは、その地にバカでかい社を建てさせまして…

安生　自らを祀れと、そう言ったんだとよ。タジマ、これはどういうことだと思う？
いろり　え？
安生　バチになったんだと思うんだよ。ジョフツは
いろり　バチですか…
安生　もし何か王道に行き過ぎがあれば、バチを当てる、天罰そのものと化す。そんな呪いをかけて、自らの身を暴走の歯止めとした…ジョフツは国と引き換えに、神になったんだ
いろり　不老不死の命とともに？
安生　そうだ。だからタジマ、この世のことはジョフツ様がちゃんと見てくれてる。バチが当たるとしたらおまえの親父にじゃない。おまえの親父をこんな酷い目に合わせた奴に、それは当たるはずだ
いろり　…はい
政　そのジョフツが、この国譲りの大計に臨み、ついに不老不死の術を会得したという一角を安生ばんばたちはずっと探しているのだった。そこは「ときじく」と呼ばれる。時の外ともいうべきその永遠の一角にある不老不死の実「ときじくのかくのこのみ」を見つけられれば、老いた命が捨てられねばならないルールも変わる…
ひばり　もしかして…
美佐子　ひばり？
ひばり　もしかして…宗助さんを襲ったあの仮面をつけた影も、その不老不死の実を探してるってことはないかな？
政　おまえ、何を…
ひばり　…苦しそうだった。息も荒くて…それが怖かった…何を考えてるのかはわからなかったけど…獣というよりは、あの様子は人に近くて…何かとても焦っていたというか…何か、時間に追い立てられているような…
安生　うむ…

いろり　師匠？
安生　もしかすると、その仮面に悪霊が宿っていて、人にとり憑き、人の生き血を吸うのかもしれない。そうやってかりそめの肉体を次々と綱渡りして、ギリギリのところで存在を繋ぎとめてる
政　そう考えると、不老不死の肉体というのは、まさに絶好の獲物だな
いろり　ジョフツの国が攻め込まれたのも、それが目的だったとか？
安生　ありえる。しかもその仮面にしみ込んだ悪霊の正体が、すでにあの世へ旅立ったはずの秦の始皇帝の尽きせぬ欲望と未練だったとすれば…
ひばり　だからこそ、どこかの誰かが、地面の下に埋めて封印したんだ…
美佐子　それがたまたま掘り出されて、眠れる獅子を目覚めさせてしまった？
ひばり　急がないと！あいつよりも先にその実を見つけないと！
いろり　奴が不老不死にでもなってしまったら…
政　恐ろしいことに…
いろり　そうなったら、もう誰にも手が付けられない
安生　だからそうなる前に、こっちもいよいよ動きだすしかねえ

不死の山を登ってくるイソ、ハンサイ、イソジン、カモツヌの軍

カモツヌ　ハア…ハア…ハア…ハア…
イソ　大丈夫かカラス
カモツヌ　何のこれしき…頂上に着くまでは…ハア…ハア…ハア…
イソ　ハアハアじゃねえよ、カラスってのは、カアカアだろ
ハンサイ　もぬけの殻だな。この山には人の気配が全くない…不死の山というよりは、死の山だ
マモル　フッさんは本当にここで不老不死の術を手に入れたんですかね？

イソ　何とも言えんが…
マモル　ああ、山と谷が入り組んでるし、霧が深くて…どっちから来て、どっちへ行けばいいのか…
カモツヌ　ジョフツに欺かれたんじゃないだろうね
イソ　だったらそこらに伏兵が潜んでいるさ。ここまで、一切何の抵抗もなかったんだ。フッさんは約束通り、国を譲った。こっちも約束通り、故郷秦国をはるかに望む西の果ての海辺に、隠居の社を立派に建ててやらないとな
ハンサイ　…その不死の山の頂で、フッさんと、遂に再会する手筈になっていた。天を頭上に頂く不死山の頂上で、国譲りの手打ちをし、フッさんはヌシの座を下り、この地を去ると…だがあまりに命の気配がしない。果たしてここに、そんな大きな国が本当に一時でも栄えたのだろうか？すべてがはったりに私には思えてきた。そもそもフッさんは、始皇帝に不老不死というはったりをかまして、ここまで来たのだ。すべてを信用してはならない。だから私は監視役として遣わされた。始皇帝もどこかで疑っていたのだ。相手はそういう間際を生き抜いてきた策士なのだ
イソ　どうしたハンサイさん？
ハンサイ　やはりこれは、罠ではないか？
イソ　あんたまで
カモツヌ　罠は罠でもこっちが仕掛けた罠だ。この山の頂で、逆にイソジンの糧となって血を流す生贄は、ジョフツと、ヤツに従う幾千の童男童女さ
イソ　だからそこはまだ先方との話次第でどう転ぶかわかんないんだから。先走るなって。俺に任せろ
マモル　(遠くを見て)イソやん！

崖の下から、白い鳥の群れが鋭い鳴き声をあげながら、西空へ向かって飛び立つ
それを見てイソジンが何かしゃべるが聞き取れない

イソジン　（聞き取れない声）
イソ　おい今、イソジンが何かしゃべらなかったか？
イソジン　（聞き取れない声）
マモル　え？すいません、何ですか！
イソジン　（聞き取れない声）
イソ　イソジンが何か言ったんだよ
マモル　すいません、全然聞こえません！
カモツヌ　（白鳥の鳴き声に翻弄されて）…待て！逃がすか…ジョフツ！
ハンサイ　ジョフツ？

カモツヌは鳴き声を追って、崖の縁まで一羽の白い鳥を追いかけていく

イソ　カラス、やめろ！
カモツヌ　待て！逃がすか…おっさん！…あぁぁぁぁ！

カモツヌは羽を広げて崖から空に飛び上がろうとするが、白い鳥についていけず、そのまま無残にも崖下に落下していく
黒いカラスの群れが崖下から湧いたように飛び立ち、それから一目散に急降下して落ちっていったカモツヌに群がる

イソ　ああ…ああ…
ハンサイ　…イソやん
イソ　え？

見ると、イソジンの脱皮が始まってしまう

顔である仮面はポロッと落ちて、(身代わり猿の)脱皮体が転がる
だがイソジンを再び復活させることができるカモツヌはいない

イソ　　…イソジン…カラス…何もかも間に合わなかった！何でこの世はこんなに刻限で満ちているんだ！

落ちていた始皇帝の仮面が何か言ったようにイソには聞こえる

イソ　　え？
マモル　　イソやん？
イソ　　しっ！今そいつが何か言ったんだ
マモル　　イソやん、しっかりして
ハンサイ　　いや、私にも聞こえた(面をイソからとる)
イソ　　…ハンサイさん、そいつは俺の子だ、こっちに渡せ
ハンサイ　　…イソやん、その前にこれは我が君だ
イソ　　俺にとっては俺そのものだ
ハンサイ　　我が人生のすべてだ…
マモル　　二人ともどうしたんだよ？
イソ　　こっちに渡せ
ハンサイ　　決して手放さぬ
イソ　　それは俺の顔だ
ハンサイ　　私の顔だ
イソ　　剣が決めてくれるさ
ハンサイ　　ならば剣に委ねよう

剣をまじえるイソとハンサイ

番無雨　で、どっちの血が流れた？
まもる　ハンサイさんだ。あの人は所詮役人だからな（ハンサイが倒れる）
番無雨　でもイソやんだって元をたどれば船乗りだ
まもる　結局勝者を選んだのは、始皇帝の仮面なのさ

イソやんが始皇帝の仮面をつける
銅鑼の音

まもる　…こうしてイソやんが、この日本国の始まりの皇帝となったとさ

そう話す番無雨とまもるはときじくの一角の橘の木の根元に腰を下ろしている。静かに雪が降っている

ジョフツ　…山へ行く日に雪が降るのは運がいい。その前に雪が降り積もっていては、この不死の山へは入れない。
山へ入ってから雪が降れば、その命のすべては白く冷たくゆっくりと閉じていき、やがて時が凍りつく。
美しいままの、生きたままの時間が永久に凍り付く…

8

安生、三羽鸚鵡、いろり、番一家が仮面の怪物を探して山奥にわけいっていく
それは政が無雨を捨てにいった道である

政　　この道は…！
安生　　ルート5　すべての道不死山頂に通ず
鸚鵡　　不死山麓鸚鵡鳴

死んだハンサイが笛を吹く
神楽、祭りのような山入りの景

唄(大勢)　　不死山まいりはつろうござんす。ご苦労さんでござんすな
　　不死山まいりはつろうござんす　ご苦労さんでござんすな

政　　…裏山の裾を廻って柊の木の下に来る。そこから先は不死山まいりでなければ行ってはならない道だ。尾根伝いに少し下って進んでいく道は、左は絶壁、右はそそり立つ山の坂。四つの山に囲まれた奈落の底のような谷を廻ると、七谷のところまで来る。そこを越すと、そこからは道はあれども道はない…

政が岩に手を触れると白骨死体が倒れ、カラスが飛び立つ
そこがかつて無雨を捨てた場所だと気づく政

安生　　畜生。すべてのルートは、鸚鵡どもが、上空よりしらみつぶしに測量してきたはずだ。だが伝説の「とき

じくの一角とみなせる場所はどこにも見当たらない…

政が黙って座り込む

美佐子　…あなた？
政　…ババアがいねえ
ひばり　お父さん？
政　俺たちが見落としている場所がまだどこかにあるはずだ。俺は確かにここにババアを置いた
美佐子　政さん…
政　だが、ババアはいねえ。歯を石で砕いた死体がどこにもねえ
安生　その婆が動いて、もしかすると、ときじくの一角にいるとでもいうのか？
ひばり　お婆ちゃんが、不老不死の一角に？じゃあお婆ちゃんは生きてるの？
政　そりゃわからん。だが、あれから一体どこへ、何のために、移動したのか…
安生　(少し離れたところへ向かって)七谷の崖下はどうだ？
カゲマ　砕けた白骨が雪のように積みあがってるばかりでどうにも…
いろり　(谷を覗き込んでいる)
政　いろりちゃん…危ないから…
いろり　…その場所は、空からや地上からの目線では決して見えないところにあるんじゃないでしょうか、師匠？
安生　なぜそう思う？
いろり　あいつがその実を手にすれば何もかも終わりだ。今も昔もそれは同じなのだとすれば、あいつに絶対見つからないように、そもそもその場所は必死に隠されてるんじゃないでしょうか
安生　死角…そこは、俺達、今を生きる者の目には死角になっていて、その今って時から弾き出された命だけ

が、自ずと流れ込んで滞留する、滝の裏側のような場所なのかもしれない…

ひばり　そこにお婆ちゃんはいる？

いろり　まもるもいるかもしれない

安生　そして、不老不死となったジョフツも…

イソジン（始皇帝の仮面をつけたイソ）が岩陰から密かに覗いている

政　…だったら俺たちは、もう探さない方がいいんじゃないか

ひばり　どうして？

政　…俺たちがそこを見つければ、その俺たちをあいつが見つけちまうだろう。あいつがそこを見つけちまえば、ババア達の命がようやく行き着いたのかもしれねえ、せっかくの場所が、台無しにされちまうんじゃないか？

ひばり　でもだからって、あの恐ろしい仮面の影を、このまま野放しにしておいたら？

イソジンが再び岩陰から顔を出しているのをひばりは発見する

ひばり　…いたぁ！

安生　鸚鵡ども！

安生は猟銃を構えて、イソジンのいる方向に威嚇射撃

山肌をとかげのように高速で這いながら走って逃げていくイソジン（イソ）、それを追うが見失う鸚鵡達

カラスに交じって空を白い鳥の群れが飛ぶ

それを見つけて叫び声をあげて追いかけるイソ（時制は古代へ）

力尽きて、止まり、フラッと倒れる
マモルが追いつく

マモル　イソやん！(仮面をとり、水を飲ませる)
イソ　ハア、ハア…白鳥は？
マモル　あっちの空に
イソ　見失うな(行こうとする)
マモル　無理ですよ、少しは休まないと、死んじまう
イソ　あれは秦国の港からどこまでも東へ逃げゆくフッさんの船の群れだ
マモル　違います。あれは西の空へ、夕日に向かって飛び往く白鳥の群れです
イソ　あいつらが不老不死の一角に舞い降りる、その瞬間を絶対に見逃すな。そうでなければ、イソジンに賭けた俺たちの時間が藻屑となって、暮れゆく闇の中に溶けちまうぞ
マモル　その前に、イソやんの命が死んじまいます
イソ　仕方ねえ。カラスはもういねえんだ。誰か生きてる者がこいつの命を繋ぐ身体になってやらねえとな
まもる　ぶっちゃけて言えば、俺にとってイソジンってのはどこまでいっても宇宙人の距離感だった。イソやんはあのカラスの魔女に魂射貫かれて、仮面のチビをわが子のように思っちまってたが、俺にとってはずっとしっくりこねえことだった。それより、ここまで育ててもらったイソやんの命が消えかけていることが怖くてしょうがなかった
番無雨　だからあんたはその仮面を地面に埋めて隠したんだね
まもる　…イソやんが疲れて眠った隙にね。だってあのままじゃイソやんはあいつに生き血を吸われ続けてさ、干からびて、のっぺらぼうの猿になって転がるのは目に見えてるじゃないか
番無雨　だがイソジンの姿が消えたことで、イソやんの身体はむしろ急激に弱っていった。虚しさと悲しさが一気に命を蝕んだんだ

まもる　…やっちまった事の重大さに気づいた頃には、俺はもう仮面を埋めた場所のことを忘れちまっててよ。馬鹿すぎるよ。いくら探してもイソジンの顔は出てこねえ。もう情けなくなってね。一体俺の一生は何だったのか？俺の命は何のためにあったのか？イソやんの身体もどんどん弱っていって、どうしようも止められなくて、もう、死にたくなったよ。ちょうど目の前に深い谷があってさ、何ならフラッと飛び込もうとさえ一瞬考えたりもしたんだ…

番無雨　違うよ、考える前に、あんたは実際飛びこんだんだよ、七谷に。息子に放り込まれたのと同じように

まもる　え？

瀕死のイソやんを助けられないと悟って絶望したマモルが衝動的に崖下に飛び込む

まもる　あぁぁぁぁぁ！

番無雨　そしてあの日、頭の上からあんたが突然降ってきた…　雪でも雨でもなく、タジマモルが私の目の前に突然降って来たんだ！

まもる　ああっ！

マモルが地面にたたきつけられる

崖の絶壁のひさしのようなところにバンブウがいる。その目の前に落ちてきたマモル

一本の木に橘の実が一つなっている

マモル　…バンブウ…おまえ、こんなとこで何してるんだ？

バンブウ　…タジマモル…おまえこそ、何でここに来れたんだ？

まもる　わかんねえよ、そんなこと

バンブウ　…「生きよう生きようと欲する者には決して見あたらず、生きまい生きまいと欲する者にとってのみ存

在する聖なる場所」

マモル　何言ってんだよ、バンブウ

バンブウ　ここがときじくの一角。そしてこの実が、ときじくのかくのこの実

マモル　え？

バンブウ　不老不死の実だよ

マモル　ええっ…

バンブウ　つまりこの実は、この実を全く望まない者にしか見つけることができない。フッさんが記念に植えたんだ。この不死山に新たな国をとうとう打ち建てた時にね。そのうち季節が巡って、この木に実がなれば、それこそまことの不老不死の実に違いないって、冗談とも本気ともつかない、あのフッさん節でさ…

…

マモル　そしたらほら、実がなったんだよ。いくつもなった。でもフッさんはそれを見ずに行ってしまったの。一

バンブウ　人で行ってしまったんだ、遠い遠いときじくの彼方へ

マモル　何で…

バンブウ　フッさん一流のはったりだよ。永遠に姿を消すことで、その存在を永遠のものとした。畏れを知らぬ者を押しとどめる永遠のバチとなった。それがフッさんの不老不死の術なんだよ

番無雨　それって、もしかして、フッさんがその…死んだってこと？（谷底をのぞき込む）

ジョフツ　…私も仲間もみんながフッさんについていこうとしたんだ。だけど、そんな皆の目の前で、ときじくの木がみるみる実をなした。偉大なるフッさんの壮絶な最期に直面し、生きまい生きまいと欲する私たちの前に、その衝動をおさえつけるように、目の前に黄色い実がいくつも実った

バンブウ　生きよう生きようと欲する者には決して見あたらず、生きまい生きまいと欲する者にとってのみ存在する聖なる場所。ときじくの一角になる、ときじくのかくのこの実こそ、この世に二つとなき、不老不死の霊薬なり

フッさんの言葉を思い出しながら、仲間たちはこの実を食した。そして順番に一人づつ、ここから宙を舞

って恩師の後を追いかけた

番無雨　そしていよいよ、最後にこの番無雨の番が来た

まもる　そこまで聞いて俺は咄嗟に、その最後の実をひったくった。そして何か叫ぶバンブウを振り切って、蜘蛛の糸をたぐるように崖を登っていった。思いもよらぬ力が出たさ。衰弱したイソやんにその実を食わせてやろうと思ったんだ。イソやんがいつまでも元気ならイソジンもいつまでも元気だ

まもる・マモル　イソやんがいつまでも元気なら俺だっていつまでも元気だ…

マモルは崖をよじ登ってイソやんのところまでたどり着くが、イソやんはすでに死んで冷たくなっている

マモル　イソやん…

まもる　ああ…間に合わなかった…何もかも間に合わなかった…何でこの世はこんなに刻限で満ちているんだ！

再び絶望の中で崖下に飛び降りるマモル

まもる　これ全部、イソやんの名言集！

番無雨　…そうして、またあんたが頭の上から降ってきた

まもる　ああっ！

マモル　…すまなかった。これはおまえのもんだった（実を返す）

バンブウ　返せよ、全く！おめえらは全くどうしてそうなんだよ！おめえもすっかり自分勝手な奴になりさがりやがってよ！

マモル　本当だよ。その通りだ、こんなの生きてる価値全くないよ

バンブウ　おまえなんかにフッさんの実を食べる権利はないんだ！

マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル

そうだよ。本当にない。全くない。速攻ここから消えるべき命だ
でも私にはある
あるよ。あると思うよ
…
…おまえ迷ってんのか？
迷ってはいない
それで最後になっちまったのか？
誰かが最後にはなる、それが順番ってものだ
怖いのか？
永遠の命が待ってるんだぞ、何を怖がることがある？
でもフッさんの冗談かもしれないんだろ？この実はただの蜜柑かもしれない
…みんな信じた。私も信じる。もう何年もあの人を信じてついてきた人生なんだから
じゃあ食えよ。がぶっと一息でさ
（実を食う）
どうだよ
まだわかんねえよ
うまいのかまずいのかって聞いてんだ
味までわからないよ！
すっぱいぐらいわかるだろ
わからないんだよ
少しは味わったらどうだよ（バンブウの手をとる）
な、何するんだ、おい！（その手を拒む）
俺が一緒だ。一緒に飛んでやる

バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ

…
と言っても俺は単純に死にに行くだけだから、最終的な行先は違うがな
…だったら半分食えよ
え？
で、うまいのかまずいのか言ってみろよ（実をつきつける）
…どうだっていいけどな（実を受け取って食う）
どうだよ？
まあ、そうだな…
すっぱいくらいないのかよ
…この状況で、味なんて、わからんわ
だろ！

冷たい風が崖下から吹きあがる
怖さのあまり二人は自然に手を繋ぐ

マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ
マモル
バンブウ

…
…
何か…変な一生だったよ
…で…変なご縁だったな。なんで最後に一緒に手繋いでるかな…
…あ、バンブウってさ、竹って意味だよね
竹？
竹林の竹…いつかフッさんに聞いた気がする
へえ

マモル　まあどうでもいいんだけど
バンブウ　うん…話し終わった

二人は手を繋いだまま崖下に飛び込む
カラスではなく、白鳥が谷底から飛び立つ
その白鳥の飛跡が降りしきる雪に変わって、何千年も先、同じ場所に番無雨とまもるがいる
ときじくの木には実が一つだけついている

番無雨　そうしてまた生まれるんだ。私もあんたも(ときじくのかくのこの実をもいで実をかじる)…もしかしたら他の船の仲間たちも
まもる　それは本当に不老不死の実なのか？
番無雨　もしかしたらフッさんも(実をまもるに差し出す)
まもる　えっ？
番無雨　半分はおまえの分だ
まもる　…うまいのか？
番無雨　いい加減思い出せよ
まもる　(かじる)…思った通りの味だよ
番無雨　何度も食ってるからな
まもる　…駄目だ…たぶん味覚いかれてるわ
番無雨　色々いかれてんだよ
まもる　見た通りだよ
番無雨　だがそれもただの道草だ
まもる　道草？

番無雨　さあ、ここから飛び下りよう。そしてまた生まれるんだ。私もあんたも。そして八十越えたら、どうせまたここに帰って来る、その繰り返し・・・

まもる　そんなことある？

番無雨　これが私たちだけの秘密のルールさ（マモルの手をとり崖下に飛び込む）

まもる　あぁぁぁぁぁ！

## 9

遠くから音曲が聞こえてくる
五王と呼ばれる者がまぶしく現れる
始皇帝の面をつけたイソジン(宗助)が捕らえられ、獲物のように縄で引きずられてくる

カゲマ　ルートゴルートゴ、野に放たれた仮面をついに捕らえたのは、高天(タカマ)と呼ばれる高層域にあってこの世を影で牛耳る五王と呼ばれる五人の長者であった

ヤミマ　ルートゴルートゴ、すなわち五王とはイシヅクリ、クラモチ、アベミウシ、オオトモミユキ、イソノカミマロタリ

クラマ　ルートゴルートゴ、競うように懸賞金の額を吊り上げ、仮面を血眼に探していたのも、その五王だった

政　高天の五王…聞いたことはあったが

美佐子　本当にいたのね

ひばり　なんと凛々しく眩しいでたち。あの人たちが、あの恐ろしい怪物を捕まえてくれたのね！

安生　だが同時に、眠れる怪物を叩き起こした張本人たちだよ

政　それより、あれ、あの仮面をかぶってる、あの体つきは…

いろり　…オヤジだ

政　宗助さん、生きていたのか！

安生　だがむしろ、死ぬよりキツイ状況に置かれてんのかもしれねえな

美佐子　そんなことより、頭を下げて

イシヅクリ　さて、少々手がかかりましたが、件の一品、始皇帝のデスマスク、こうしてようやく手に入りました。ご覧の通り、古代の粗末な仮面でありながら、その実、人の身体に寄生して、生き血を吸って命を乗っ取り、己が生き伸びる糧とする。聞いていた以上に危険な存在…

アベミウシ　それだけ始皇帝という男が、史上破格の人類であったということだよ。時空を飛び越え、まさにすべてを我が物にせずにはおれない、圧倒的スケールの欲望には脱帽…

イソノカミマロタリ　戦国中華の大統一。当時にして史上例を見ない中央集権帝国の成立。宇宙からでも目視できる万里の長城…

オオトモミユキ　始皇帝の夢は永遠に属するものです。だからこそ、この仮面はいつの時代にも、そこに生きる人の命を伝って蘇ることをあきらめ…

クラモチ　つまり刻限を持たないってことなんだよ。限界を持たない。生きることの意味はそこにしかないんじゃないかな。いくところまでいく、のではなく、いくならどこまでもいく…

ひばり　あの人たちは何の話をしているの？

政　少なくとも俺たちには関係ない話だよ

美佐子　あなた

イシヅクリ　さてそれで問題は、この始皇帝の仮面、つまるところ、ここにいるどなたのものといたしましょうか？

アベミウシ　アハハ。困りましたな

オオトモミユキ　五つあれば悩むこともないものを、仮面は一つ

イソノカミマロタリ　五人の我らが一人の人間であれば悩むことはなかったろうに

クラモチ　天下の五王に一つのお宝。山分けするわけにも、いきませんしねえ

縛られながら抵抗を続けている宗助

たまりかねていろりが五王の前に飛び出す

安生　よせタジマ！

政　いろりちゃん！

ひばり　いろりん！

いろり　皆さん…天下の五王の皆様に少しだけお耳をお貸しいただきたい！
アベミウシ　…う？…ちょっと、何だ、どういうあれ？
クラモチ　そういうあれ？
イシヅクリ　トラブルだ。トラブル
オオトモミユキ　面白いね
イシヅクリ　そういうあれじゃないんです。誰か何とかしなさい
イソノカミマロタリ　まあいいじゃないか
オオトモミユキ　耳を貸してみましょう。減るもんじゃなし
アベミウシ　初めてですよ、私は。こういうのは
イソノカミマロタリ　まあいいじゃないか。時間は十分にあるんだし
アベミウシ　でも無駄にはしたくないんだよね
いろり　…いいですか？
政　やめておけって
いろり　その仮面のことは私たちにはよくわかりません。秦の始皇帝とやらのことも、私たちにはてんで何一つわかっていません。本当に。その仮面が皆さんがそこまで望むものなのなら、とっとと遠くへ持って帰っていただきたい
五王　ふぁぁお
いろり　でも、その仮面の下にいて、その仮面に乗っ取られて、無様にあがいてる、その人は、腐っても私の父なのです。どうかその父の身体だけは、ここに置いていってもらいたいのです
五王　ふぁぁお
いろり　父は決して悪い人間ではありません。でも、八十越えたじいちゃんを、まもるを七谷の底へ突き落とした。私はその瞬間を見ました。確かに父がやったことです。人間として許されることじゃないと思う。だからこそバチが当たったんです。でももうこれ、さすがに充分ではないでしょうか

安生　その辺にしとけ
政　さ、いろりちゃん、こっちへ…
いろり　(その手をふりほどいて)…父を追い詰めたのは、ルールです。老いた命を、いらないものとして山に捨てる。五王の皆さんにお聞きしたいのはそこです。このルール何であるんですか？
五王　ふぁぁぁお
アベミウシ　変なルールがあるんですね
クラモチ　田舎の風習だろ。貧しさっていうのはホント野蛮だよ
イシヅクリ　だったら私たちもそろそろ山に捨てられなきゃいけないですな、ハハハ

ポンという音と共にイソジン(宗助)の仮面が剥がれ、のっぺらぼうの宗助の身体が転がって身代わり猿のように縮こまった残骸として固まる
そこに駆け寄るいろり、安生、番一家

イソノカミマロタリ　おお…びっくりしたぁ
オオトモミユキ　始皇帝の仮面を見ろ

仮面の下に流体のように土が湧き上がって、不気味に揺れる始皇帝の顔

アベミウシ　あれは…どういう状態？
クラモチ　餌を欲しがってるんだ
イシヅクリ　無限の欲望を繋ぎとめる身体が必要なんです
イソノカミマロタリ　つまり生贄が必要なんだな
オオトモミユキ　人が限界を越えて先へと進むためには、
クラモチ　人がその夢を永遠の不老不死のものとするためには、

イソノカミマロタリ　人の犠牲を積み重ねていく必要がある
オオトモミユキ　ああ、何と冷たく美しき、仮面のロジックだ
政　五王は、始皇帝への生贄として、そこにいた下層の者たちの中で、当面不要であるものを順に選んでいき、荒ぶる仮面の前に、欲望の依り代として差し出していった
カゲマ　まずは我ら三羽de鸚鵡
ヤミマ　人間でないもの
クラマ　ともすれば、塩で焼かれて、晩酌のつまみにされる命を

鸚鵡達の身体は始皇帝の仮面にのっとられて大きな一羽の鳥となり

三羽(イソジン)　(聞き取れない一言を発す)

ポンという音とともに仮面は剥がれ、身代わり猿の形で転がる残骸となる

安生　次には数えて最も年老いた者を。来年には山に捨てられるさだめの、すでにいらぬとみなされた命を(安生の身体を仮面がのっとる)
安生(イソジン)　(聞き取れない一言を発す)

ポンという音と共に仮面は剥がれ、身代わり猿の形で転がる残骸となる

美佐子　次には、もう子をはらむことができなくなった中年女の命を(美佐子の身体を仮面がのっとる)
美佐子(イソジン)　(聞き取れない一言を発す)

ポンという音と共に仮面は剥がれ、美佐子が身代わり猿の形で転がる残骸となる

政　　次には、疑うことを覚え、今までのようには生きられなくなった男の命を（政の身体を仮面がのっとる）

政（イソジン）　（聞き取れない一言を発す）

ポンという音と共に仮面は剥がれ、政が身代わり猿の形で転がる残骸となる

ひばり　　次には、すべてを見聞きして、沈黙に耐えられなくなった少女の命を（ひばりの身体を仮面がのっとる）

ひばり（イソジン）　（聞き取れない一言を発す）

ポンという音と共に仮面は剥がれ、ひばりが身代わり猿の形で転がる残骸となる

いくつも連なった大小の身代わり猿が天井から吊るされているのが見えてくる

いろり　　次には・・・（仮面がいろりの顔に張り付きいろりの身体を乗っ取ろうとしたその時）

雷鳴、突然の豪雨

慌てふためく五王

五王　　濡れる！濡れる！溶ける！溶ける！

光が激しく瞬き、空から雷光に包まれて輝く五羽の白い鳥が稲妻となって降下する

不死の山の頂にて天に祈祷をささげるジョフツの姿が見える

五王は稲妻に貫かれ、命を落とす

いろりが張り付いた始皇帝の仮面を力ずくで剥がして地面にたたきつける

いろり　　…バチが当たったんだよ…

いろりは穴を掘り仮面を地中深くに埋める

## 10

ときじくの一角にいるジョフツとバンブウ
まだ実をなしていない橘の木が一本生えている

ジョフツ　…それは、それを全く望まない者にしか見つけることができない。そのうち季節が巡って、この木に実がなれば、それこそがまことの不老不死の実だ
バンブウ　フッさんは、その実を食べる前に、行ってしまうのですか？
ジョフツ　…

雪が降ってくる

ジョフツ　…山へ行く日に雪が降るのは運がいい。その前に雪が降り積もっていては、この不死の山へは入れない。山へ入ってから雪が降れば、その命のすべては白く冷たくゆっくりと閉じていき、やがて時が凍りつく。
バンブウ　美しいままの、生きたままの時間が永久に凍り付く
ジョフツ　フッさん、不老不死とは結局どういうことですか？
バンブウ　ここにとどまり…すべてを見届けないといけないってことだ
ジョフツ　すべてを見届ける？
バンブウ　そういうものになる覚悟だ
ジョフツ　覚悟？
バンブウ　私にはない。だから先に行く
ジョフツ　どこへ行くんです？
　どこまでも遠くへ行く。船に乗って、海を渡り、誰も見たこともない国に行く

バンブウ　私も行きます
ジョフツ　好きにするがいい。自分で選びなさい

ジョフツは消えるように、崖から飛び降りる

消えたジョフツと引き換えのように、橘の木にたったひとつ、ゆっくりと黄色い実がなっていく

番無雨とまもるは時間を超越したときじくの空間に、文字通り浮いている
まもるは怪我をする前の普通の姿に戻っている

番無雨　フッさんは、こう言っちゃなんだが、自分本位な人だった。フッさんはフッさんで、何より大事なことがあったんだよ。だから私たちのことなんぞは、さほど親身になって考えてなかった。最後には自分のことを優先して私たちのことは突き放した。こっちは必要以上に親だと思っていたもんだけど、フッさんにとってはさほど必要じゃなかった。もういらなくなったんだ
まもる　そんなわけねえだろ。親ってのは、いつか子供を突き放す…っていうか、ここどこだ？
番無雨　だけどね、いらなくなってなんぼなんだよ。私たちみたいなもんは
まもる　浮いてる？これ浮いてる？
番無雨　そもそもいらない子供だったから、船に乗せられたんだ。あんたも私も。もともとそこから始まったんだ、この話は
まもる　あぁぁぁぁ！

落下するまもる

まもる
番無雨
まもる
番無雨
まもる
番無雨

まもる
番無雨
まもる
番無雨
まもる
番無雨
まもる
番無雨

痛い！痛…くない…(自分の身体を見て)なおってるねこれ、色々なおってるねこれ
さあ道草は終わりだ。またここから始まるよ、色々と込み入った話が
何だあの光る裂け目は？
月っていうんだよ、バカ、知らないのか？
…あれか！
さあ、またここから始まるよ。(歩き出す)そしてまた現の世にはいらなくなった時分に、ときじくの木の下で落ち合おう
待て、もしいらなくならなかったらどうすりゃいいんだ？
それはそれに越したことはないんだよ
そしたら俺達どうなるんだ？
言ったって、どうせ忘れちまうよ
教えてくれよ
教えることはねえよ
あぁぁぁぁぁ！(足を踏み外して崖下に落ちていくように月の光に向かって落ちていく)
…やずだかだ、でぃぼ(飛び込む)

月の光に吸い込まれていくまもると番無雨

いつともしれぬ遠い世にて
不死山麓の村

麓に暮らす爺さんと婆さんと子供たちがいる
爺さんが山へ柴刈りに行くと輝く竹を見つけ、切ってみると中から女の子(バンブウ)が

婆さんが川へ洗濯にいくと桃が流れ着いて、割れると中から男の子(マモル)が
子供たちが畑を耕していると、土の中に始皇帝の仮面をみつける

子供たち　　なんじゃこりゃ？

カラスが夕焼けの空に一斉に飛びたつ
上空を横切る白鳥の鳴く鋭い声が聞こえる
爺婆、子供たちは思わず空を見上げる

遠くから声が聞こえてくる

村人　　不死山まいりはつろうござんすが、ご苦労さんでござんす

終わり